

翻
訳

宮效聞 他編著 『社会主義企業管理』

宮效聞等編写 《談話社会主義企業管理》

上海人民出版社 一九七四年

小 野 進 訳

訳出にあたって

企業管理の問題は、資本主義の企業管理であれ、社会主義のそれであれ、マルクス主義の見地にたつかぎり、経営学（私見によれば、ブルジョア経営学は存在するが、マルクス経営学や批判的経営学などは存立しえない。何故なら、科学研究の領域は、研究对象とする矛盾の特殊性によって区別される）だけの問題ではなくて、政治経済学の問題であり、政治経済学の根本原理の一つである（マルクス経済学者のあいだでは、管理の問題が重要な問題のひとつであるのにかかわらず、これまで、この問題がとりあげられなかっただけのことである）。

本書の大きな特色は、ソ連における「社会主義」企業管理

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

の実際の経験を反面教師としながら、主に、新中国成立以来の社会主義企業管理における実践の歴史的経験のなから、マルクス主義の普遍的真理と結びつけて、割りだされた、社会主義政治経済学における、新しい独創的な企業管理理論であるということである。マルクス、エンゲルスそしてレーニンの古典的文献に散見する個々の古典的規定・命題を現実におしつけ、あてはめたものではない。

原書は、私の知るかぎり、文化大革命以後において、我々が日本で読むことのできる唯一の文献であり、それは、全四九頁の小冊子であるけれど、その内容は、社会主義企業管理論の文献としては、その思想の深さにおいては出色のものである。マルクス主義では、すべての問題を思想上の問題とし

一一九（一一九）

て把握しておかなければならない。真、善、美は、つねに、偽、悪、醜との対比において存在するという見地にたつなら、本書のすぐれた特徴は、最近刊行された、ソ連の『組織と管理』(グビシアニ著・岩尾裕純監訳、上・下二冊、ミネルヴァ書房)と対比すれば明白になるであろう。企業管理思想の深さにおいて、両者のあいだに、根本的な越え難い深淵がみいだされる。社会主義企業管理論の中国型とソ連型というようなものではない。民族性の相違とか、生産力の発展水準の差異とかではなくて、世界観あるいは思想上の原理的相違である。中国の社会主義企業管理理論は、マルクス主義によってつらぬかれておられるけれど、上記のソ連の「それ」は、生産力説あるいはブルジョア世界観⁽³⁾の一変種としての修正主義(修正主義は、労働者階級の内部におけるブルジョア階級の古い思想体系をもっとも集中的に表現したものであり、非常に頑固な思想である)によってつらぬかれており、実質的には、資本主義企業管理理論と違ってさしつかえない。

さて、ここに訳出したものは、この小冊子の全訳である。目次をあげておけばつぎのとおりである。

一 労働者は社会主義企業的主人である

- 二 企業管理は階級性をもっている
- 三 管理もまた社会主義教育である
- 四 制度は大衆が積極性を発揮するのに有利でなければならぬ
- 五 規則と制度をうちやぶることとうちたてることに正しく対処する
- 六 規律は大衆の自覚の上にもたてなければならぬ
- 七 大字報(壁新聞とも訳されている。訳者)は大衆が管理に参加する武器である
- 八 経済採算の社会主義原則を堅持する
- 九 大衆と結合した管理機構をうちたてる
- 十 党の指導の下に革命委員会的作用を発揮する

(数字は訳者がつけた)

原本の引用文献の注は、頁ごとに必要な場合その頁の下欄についているが、訳出にあたっては、章ごとにまとめておし番号にしておいた。また、最低限、必要なかぎり訳注をつけ加えておいた。この本が、編集された目的については、編集後記にふれられているので、その全文をここにあげておく。「企業管理をうまくおこなうことは、工場や企業の広範な労働者と幹部がつねに関心をもっている問題である。しかし、企業管理に正しく対処するためには、マルクス主義政治経済学の原理を学習し、掌握し、工作において党の基本路線をあく

まで堅持し、理論と実践とを結合し、二つの企業経営路線の境界を明確に区別しなければならない。この方面の問題を討論し、研究するための必要に応じるために、我々は、雑誌『学習と批判』の一九七三年第四号に掲載した『談話企業管理』(この小冊子に収録するときに、『工人は社会主義企業的主人』という一文にあらためた)と、『解放日報』の一九七三年七月、

八月、十二月の「学一点政治経済学」欄に発表した企業管理について論述した文章を、この小冊子にあつめて編成し、いま、大方の参考に供したい。これらの文章は、若干の工場や企業と関係単位の同志が、理論学習、調査研究、そして、経験を総括することによって書かれたものである。こんなかいこの小冊子を編集するにあたり、個別的な場所に、若干の文字の修正をおこなった(一九七四年一月、編集後記)。

最後に、付論「社会主義から資本主義への逆移行の論理——ソ連における資本主義の全面的復活に関連して——」を、訳者の訳注の意味あいをもこめて論じておいた。というのは、この問題は、社会主義経済の諸問題の研究にとって大切であるばかりでなく、現代の帝国主義や現代の資本主義の諸問題を考察する上にとっても基本問題としての意義をもつてきてい

るからである。この付論の結論は、社会主義の下では、プロレタリア階級の世界観がもつとも重要であるということである。マルクス主義の一構成部分である経済学だけのせまい観点では、ソ連における資本主義の全面的復活についてはまったく理解することはできない。

もうひとつ、最後に付言しておきたいことは、毛沢東思想の真の意義を理解せず、また社会制度上の相違を無視して、ここに訳出したようなことのうちで、体制内で形式的に実行できそうなものを猿真似をしてブルジョア大学内部で実行するよう要求することは、まったくの修正主義になることを念のために強調しておきたい。

(1) 「反面教師の役割を軽視する人は、徹底した弁証法的唯物論者ではない」(毛沢東。唯物弁証法、すなわち、対立面の統一の法則は、宇宙の根本法則であり、すべての事物は、一つが分かれて二つになる(事物はすべて一つが分れて二つになるというのは、対立面の統一の法則の通俗的、形象的な概括である)。したがって、事物を認識する場合、対象としての統一体を、二つの個々の部分に分解し、正と反の側面をはっきりと区別すること、つまり「分析」を加え、そして、分解した個々の二つの部分を総計すること、具体的には、正面を肯定し、反面を否定し、所謂「綜合」をおこない、こうする

ことよって、対象を具体的に全面的に認識することができる。換言すれば、感性的認識から理性的認識に到達することができる。見田石介『資本論の方法』（弘文堂）では、「感性的認識から理性的認識へ、というのは、それ自身は科学の方法ではありえないにしろ……」（四三頁）といったり、「感性的認識から理性的認識へ、すなわち分析をつうじての概念へ」という唯物論の原則は……」（四五頁）といった、感性的認識から理性的認識への過程を「分析」の過程だけに限定しているが、感性的認識から理性的認識への過程には、「総合」のモメントも含まれているのである。だから、弁証法的方法、すなわち分析的方法と総合的方法にしたがうならば、正面ばかりみるのではなく、同時に、反面もみなければならぬ。そうでなければ、事物を比較的、完全に認識することはできない。反面のものと比較しなければ、正面のものを深くほりさげて認識することはできない。正面のものを徹底的に認識しようと思えば、反面のものも徹底的に認識しなければならぬ。マルクス主義を深くほりさげて認識しようと思えば、修正主義は、正しくない思想であるから研究する必要はないというのには、事物の認識過程における分析的方法、とくに反面の役割を無視した形而上学的、形式論理学的の観点である。毛沢東は、このようにもいつている。「外国のよい経験を真剣に学び、また外国のよくない経験も、かならず研究し、それを戒めとすること」（訳者傍点）。形而上学的、形式論理学的な思想にだけとらわれているものには、このような観点はどうして望みがたい。

日本の弁証法的唯物論者には、戦前戦後を通して、事物の認識過程における反面の役割の意義についての認識が一貫して欠如していたように私には思える。毛沢東流にいえば、「徹底した」弁証法的唯物論者でなかったのである。戦後一時期、毛沢東の『実践論』や『矛盾論』の解説がかなりでているけれど、いまからみれば、かなり再考を要する。翻訳は、訳出の仕方が翻訳者の思想を表現するのと同様に解説者の思想が反映しているのであろう。

(2) 普遍的真理とは、客観的事物の普遍的法則に対する正しい認識のことである。マルクス主義の普遍的真理は、誰かが主観的に自分の頭脳のなかで勝手にねつぞうしたものではなくて、人類の長期にわたる実践的経験の科学的総括（所謂、分析と総合の結果）である。科学的社会主义（プロ独裁の学説、哲学、政治経済学という所謂マルクス主義の三つの構成部分）は、このように、人類の長期にわたる実践的経験を科学的に総括したものである。だからこそ、マルクス主義の普遍的真理といえるのである。したがって、これらの三構成部分にわたって数多くの普遍的真理が存在する。科学的社会主义の学説では、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁の学説がそれであり、哲学では、宇宙の根本法則である唯物弁証法の対立面の統一の法則の学説（自然、人類社会として人間の思维の発展にかなするものとも一般的法則の学説）がそれである。各種の社会形態の発展にとって、生産関係はかならず生産力の性質に照応しなければならぬという学説もそうである。政治経済学では、マルクスの資本主義にかなする経済

学説、レーニンの帝国主義時代についての学説は、現在でも、普遍的真理である。なお、科学的社会主義は、マルクス主義の全体系における核心・神髓・精髓であつて、マルクス主義とあらゆる修正主義との闘争は、マルクス主義の歴史を通じてこの点をめぐつておこなわれた。すなわち、科学的社会主義の具体的内容であるプロレタリア階級独裁の学説をめぐつて、おこなわれたのである。毛沢東は、プロレタリア階級独裁を否定するあらゆる修正主義とたたかつて、社会主義の下における継続革命の学説をうちたて、マルクス主義の全体系の神髓であるプロレタリア階級独裁の学説を發展させるのに大きく寄与した。このごろ日本では、プロレタリア階級独裁をプロレタリアートの執権とかの表現にかえたりして、人民大衆を愚弄している政党があるけれど、名は体をあらわすで、いくら口先で科学的社会主義をとなえても、プロレタリア階級独裁の学説を實質上放棄している。

だが、マルクス主義は、真理に結末をあたえない。マルクス主義の普遍的真理は、社会的実践（生産闘争、階級闘争として科学実験Ⅱ三大革命運動）の發展にしたがつてたえず發展し、豊富になつていく。数百年さきにはマルクスも古くない、あるいはかもしれない。

(3) プロレタリア階級の世界観の核心は、プロレタリア階級の「公」のためにつくす思想、誠心誠意人民に奉仕する思想（これを道徳律とか倫理としてつかまえてはいけない。認識論として把握する必要がある）であるのに対して、ブルジョア階級の世界観の核心は、私心である。私心とは、私有財産

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

制度を反映したところの、私有財産制度を擁護する私有観念のことである。プロレタリア階級の世界観の核心が、「公」のためにつくすという場合の「公」とは、文字通りプロレタリア階級のための「公」ということであつて、決してブルジョア階級のためにつくす「公」ではない。ブルジョア階級の「公」につくすことは、誠心誠意人民大衆に奉仕することに反対することであつて、ブルジョア階級に奉仕することである。したがつて、問題は、いかなる階級のための「公」かということであつて、「公」についても階級的分析を加え階級の境界線を明確におこななければならぬ。「プロレタリア階級は、自己の世界観にもとづいて世界を改造し、ブルジョア階級も同様に自己の世界観にもとづいて世界を改造する」（毛沢東）。プロレタリア階級は「全人類を解放することのみ、プロレタリア階級は自己を最終的に解放することができるのだ」（マルクス）という観点で、世界を改造するのに対して、ブルジョア階級は、私心Ⅱ私有観念という立場から世界を改造する。

人間は誰でも公と私の両側面をもつており、プロレタリア階級独裁下の社会主義社会においても、国家権力の担い手の思想・世界観が三大革命運動に参加せず、マルクス・レーニン主義の学習に努力し私心とたたかい世界観の改造につとめなければ、何時、変質するかもしれない。国家権力の中枢部門の担い手の思想が、私心を第一におき、修正主義の世界観Ⅱブルジョア階級の世界観に転落すれば、自己の世界観にもとづいて世界を改造するようになる。したがつて、国家権力

の担い手の世界観の変質は、即、国家権力の性格の変質を意味し、必然的に、生産手段の社会主義所有制の変質にまでつながっていく。生産手段の社会主義所有制は人間によってつくられた制度であるから、過渡期としての社会主義の下では、人間によって容易に破壊されていくのである。それ故、この意味においても、マルクス主義が修正主義かということが根本問題になるのである。毛沢東は、人類最初の社会主義国ソ連に、修正主義が登場し、ソ連に資本主義が全面的に復活したというにが経験と、自国のプロレタリアト独裁の歴史的経験、自分のおかれている立場から、このことを身にしみて体得したのではなからうか。もし、国家権力の中枢部が、修正主義者にのっとられた場合、それではどうするか。それには、革命的な人民大衆による奪権闘争しかないのである。文化大革命がそうであった。また、権力の中枢部が、修正主義者にのっとられないようにするためには、人民大衆にたえず世界観の改造をおこない、何が真のマルクス主義で、何が修正主義であるのか識別する能力をもった革命的な人民大衆にしておかなければならない。しかし、社会主義社会に階級があるかぎり、いつまた修正主義者が権力をにぎるかわからないのである。もしまたそうだった場合、やはり文化大革命が必要である。残念ながら、スターリンはプロレタリア階級独裁を断固として堅持したが、人民大衆の人間革命^{II}世界観の改造をおこした。このことが、ソ連に資本主義の全面的復活をゆるした基本的理由である。毛沢東は、スターリン時代のこの反面の経験を十分研究したにちがいない。

公と私は対立面の統一である。社会主義社会では、プロレタリア階級のための「公」が第一であり、「私」は第二であるようにするために、三大革命運動のなかで共産主義へ移行するまで「私心とたたかい、修正主義を批判する」(この規定は、社会主義の全歴史的時期におけるブルジョア階級批判の基本的内容を概括したものである)人民大衆の世界観の改造が必要である。毛沢東は、公と私は対立面の統一で、どのような人間も、公と私の側面をもっているので、「滅私奉公などありえない」(沒有什麼大公無私)といっている。「私」は消滅させることはできないけれど、「私」を忘れて、人民と党のために奉仕することはできる。だとすれば、私有觀念^{II}私心とは何か。私有觀念は、私有財産制の確立とともに発生したのか。それとも無階級社会である原始共同体のなかでもやはり私有觀念が存在していたのではなからうか。その場合、私有觀念とは具体的内容は何なのか。原始共同体の各成員も、毛沢東がいうように公と私の両側面をもっていたのであるから、この私的側面が、共同体が解体して階級が発生していく上で、どのような役割をはたしたのであろうか。階級発生の理論的説明に重要な問題を提起している。

批林批孔運動のなかで、林彪に対する理論的批判の一つとして「魂の奥底で革命を爆発させる」(靈魂深处爆發革命)という林彪理論が、観念論的先験論として批判されている。林彪は、実際の社会的実践から出発しないで、「問題を解決しようとするば、魂の奥底から革命を爆発させなければならぬ」といったといわれている(「靈魂深处爆發革命」是黑

〈修養〉の翻版」一九七三年第二期『紅旗』所収論文参照のこと。この「靈魂深处爆發革命」論と毛沢東の「閩私批修一」（私心とたたかい、修正主義を批判する）論とのちがいを嚴格に区別しておかなければならない。

近代経済学的見地から社会的正義を真摯に追求しているイギリスの理論経済学者ジョン・ロビンソン女史は、つぎのような認識に到達していることは注目し値する。「この二世の間、われわれは、個人の私的利益の追求 (the individuals pursuit of self-interest) こそ国民経済の繁栄の基礎であるというアダム・スミスの学説を踏襲してきた。中国は、毛沢東の思想にしがたって、これと正反対の事実を裏証しはじめたのである」(The Chinese Road to Socialism, Economics of the Cultural Revolution by E. L. Wheelwright and Bruce McFarlane, Foreword by Joan Robinson, New York and London, 1970, p. 9. 山田坂仁訳『中国経済の解剖へ社会主義への中国の道』サイマル出版会一五ページ)と。総じて、毛沢東思想に対する認識では、日本の既成の自称「正統派マルクス主義者」はまったくお話しにならないけれど、見識のある近代経済学者のなかには、かなりの確かな認識をもっている人々がいることは興味深い。

一 労働者は社会主義企業業の主人である

企業管理の活動において、われわれは、つねに、生産物の

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

数量、質そして設備、用具、原材料等々の多くの具体的な技術、業務問題にでくわす。これらの問題を処理することは、

ともすれば、物と物とのあいだあるいは人と物とのあいだの関係を処理する問題であるようにみえる。しかし、マルクス主義政治経済学がわれわれに教えるところによると、これらの関係の背後において、反映しているところのものは、逆に、人と人とのあいだの関係、すなわち、一定の生産関係である。

マルクスが、資本主義の企業管理を論述するとき、かつてつぎのように指摘している。比較的大きな規模でおこなわれる直接のあらゆる社会的あるいは共同的労働は、いずれも多少なりと指揮を必要とし、それは、個別の諸活動を調和させ、かつ、生産全体の運動が生みだす各種の一般的諸機能を遂行するのである。ヴァイオリンの独奏者は自分自身を指揮するが、オーケストラは指揮者を必要とする。この説明に基づいて、マルクスはまたつぎのようにのべている。「指導、監督および媒介というこの機能は、資本に従属させられた労働が協業的となるや否や資本の機能となる。資本の独自の機能としては、指導という機能が独自の特徴を受けとる」(1)。このことは、資本主義企業管理が反映しているのは、資本の機能で

あり、資本主義的生産関係である、ということにはほかならない。「資本家が関心をもっているのは、どのようにして略奪しながら統治し、どのようにして統治しながら略奪するのかわかることである」⁽²⁾。資本主義企業においては、資本家自身が管理をするのか、それとも資本家の代理人により企業が管理されるかどうかの如何にかかわらず、いずれも、労働者自身からできるだけ多くの剰余価値を搾取するために、資本家と労働者の関係は、まったく支配と被支配、搾取と被搾取の関係である。

社会主義企業も、管理、監督そして媒介の機能をもつが、このような機能が反映するところのものは社会主義企業における人と人との関係、すなわち、社会主義生産関係である。社会主義企業においては、生産手段は労働人民全体の所有に帰し、労働者大衆が企業の主人である。この問題については、社会主義企業管理と資本主義企業管理には根本的な区別が存在している。われわれの社会主義企業管理の各項の活動において、もし、社会主義生産関係をはなれて企業管理を論じるなら、それはかならず党の基本路線から離脱することになり、かならず社会主義と資本主義の二つの性質のことになった企業

管理の境界をあいまいにし、はなはだしきにいたっては、資本主義、修正主義の泥穴にすべりこむ危険がありうる。

企業管理は誰に依拠するのか。我国の人民革命がもうすぐ全党に向ってつぎのように指摘している。「ひたすら労働者階級に依拠しなければならない」⁽³⁾。全国解放後、毛主席は、また、労働者大衆が企業管理に参加する経験を何回もみずから総括し、そして、肯定した。毛主席みずから指示した「鞍鋼憲法」は、プロレタリア階級の政治による統率を堅持し、党の指導を強化し、大衆運動を大いにくりひろげ、両参、一改、三結合⁽⁴⁾を実行し、技術革新と技術革命等々を大いにおこなうという一連の原則を制定したもので、社会主義企業をいまいつそうりつばに経営するための明確な方向をしめしたものである。プロレタリア文化大革命⁽⁵⁾が偉大な勝利を獲得したとき、毛主席は、再度、工場や企業の指導権は真正のマルクス主義者と労働者大衆の手に掌握されなければならないとわれわれに教えている。中国共産党第十回全国代表大会における報告はつぎのように指摘している。「大衆に依拠することは、二十数年らしい社会主義建設におけるわれわれの基本的

経験のひとつである。事實はこのようである。われわれは
いかなる時も大衆を信用し、大衆に依拠し、労働者大衆が管
理に参加するように動員しそして組織することに上手であれ
ば、企業の仕事は、そのやり方がいきいきと活発になり、意
気込みも高まる。いついかなる時も少数の管理要員、技術要
員にだけ依拠し、大衆を信用せず、大衆に依拠しなければ、
企業の活動は、そのやり方が、淋しいものになり、死んだよ
うにしずんだものになる。したがって、誠心誠意労働者階級
(工人階級)に依拠して企業管理をおこない、社会主義企業
の指導権をプロレタリア階級(無産階級)の手に把握せしめる
ことよってのみ、社会主義生産関係をたえず完璧にしそし
て発展させることができ、プロレタリア階級独裁を強固にし
強化する任務を各基本単位までゆきわたらせ、生産力の発展
をたえずおしすすめることができる。

社会主義の企業は、一定の専門的な管理要員をもたなければ
ならず、かつまた、彼等の機能を十分發揮させなければなら
ない。しかし、管理要員はかならずいつもつぎのことを銘
記しておくべきである。われわれは党と国家の委託を受けて
おり、労働者階級を代表して企業管理をおこなうのである、

宮效聞他編著『社会主義企業管理』(小野)

と。このことから、いかなるときもすべて労働者大衆に依拠
すべきでありまた労働者大衆から離れるべきでない。ただ、
ソ修社会帝国主義では、生産手段の社会主義公有制がすで
に一握りの官僚独占ブルジョア階級の所有制に脱皮して変質し
ていることにより、工場の管理要員と労働者大衆との深刻な
対立を生みだし、はなはだしきにいたっては、労働者を随意
に解雇することができるほどに達している。彼等の所謂「シ
チョキノの経験」は、実質上、形をかえた賃労働制度である。⁽⁴⁾
我国の社会主義企業においては、労働者階級こそが、真正の
主人である。彼等は毛主席の革命路線をしっかりと実行し、
企業の指導権を掌握し、社会主義企業を管理している。実践
が証明しているように、広範な労働者大衆にしっかりと依拠
することよってのみ、生産における各種の矛盾、困難はい
ずれも解決することができる。どのような人間もみな奇跡を創
造することができる。

プロレタリア文化大革命以来、企業における労働者、幹部、
そして技術要員の関係に大きな変化が生じた。幹部、技術要
員は、労働者大衆と結合する過程において、思想、感情をあ
らため、路線に対する自覚をたかめた。労働者大衆も同様に

企業の主人としての責任感を一歩すすめて強め、企業管理への参加に対する一定の経験を蓄積した。多くの工場、企業は実践のなかで、党の指導の下に労働者に依拠して管理を強化する新しい経験を蓄積した。労働者大衆は順番で各項の管理に参加するのみならず、代表を派遣して三結合の革命委員会とその他の各級の指導機構に参加している。労働者大衆は、企業の生産、技術、財務、計画について積極的に討論するばかりでなく、大字報等の形式を常時活用し、幹部が党の路線、方針と政策を執行する情況に対して有効な監督をおこない、これによって、毛主席のプロレタリア階級の革命路線の貫徹実行を保証し、党の企業に対する指導をおおいに強化した。

社会主義企業において、数多くの矛盾が存在する。だが、そのなかで、決定的な作用をおこすのは、プロレタリア階級とブルジョア階級、社会主義の道と資本主義の道のあいだの矛盾であり、党内部に反映すれば、二つの路線の闘争にはかならない。林彪は、孔子の「克己復礼」を、プロレタリア階級独裁を転覆し、資本主義の復活をたくらむ自己の反動的綱領としたが、その目的の一つは、労働者大衆を社会主義企業の主人から資本主義企業の賃金奴隷にかえようとすることに

ほかならない。したがって、企業管理をりっぱにおこなうためには、かならず広範な労働者大衆に依拠し、階級闘争と路線闘争というこのカナメをしかりとつかみ、林彪修正主義路線の極右の本質を徹底的に批判し、党の基本路線によって、われわれの企業管理の工作を含むすべての活動を統率しなければならぬ。

社会主義企業をりっぱに管理しようとするれば、かならず合理的な規則と制度をもたなければならぬ。必要とする規則と制度は、現代工業生産を組織し、調整するのにならざる必要である。しかし、規則と制度は、階級性をもっており、一定の階級の意志と利益を体现している。毛主席は、「制度は大衆に有利でなければならぬ⁽⁵⁾、とわれわれに教えている。社会主義企業の規則と制度は、たえず完璧になりつつある社会主義生産関係を正しく反映し、党の指導を強化し、広範な幹部と大衆の積極性を動員するのに有利でなければならぬ。制度は生産に有利になりうるだけで、大衆に有利でありえないと考えるそのような論調は完全に誤りである。社会主義企業においては、規則と制度は、労働者大衆の実践的经验を総括し、大衆の十分な討論を経て制定しさえすれば、それは、

労働者大衆の社会主義的積極性に影響をあたえることができるばかりでなくて、さらに、このような積極性を動員するのに有利である。大衆をしるる制度は存在するが、それは、資本主義、修正主義のそれにはかならず、劉少奇、林彪のそれである。プロレタリア文化大革命において、広範な幹部と大衆はたちあがり不合理な規則と制度をつきやぶり、同時に、経験の総括を通じて、新しい合理的な規則と制度をうちたてた。これは、労働者階級の偉大な革命的創造であり、彼等の企業的主人としての高度の革命的自覚性の表現である。

労働者大衆のこのような高度の革命的自覚性は、もともと大切なものであり、それらが一旦激発すると、革命と生産をおしすすめる偉大な物質的な力となりうる。われわれは、結局、何によってこのような革命的自覚性を激発させるのか。物質的刺激によるのか。このような修正主義的「刺激」に対しては、労働者大衆はすぐにそれをいやしんでしまう。「金銭万能」の資本主義社会では、資本家は労働者に対して棍棒をふり、同時に、また、金銭をもちいて少数の労働貴族を買収し、そして飼育する。修正主義がおこなう物質刺激は、実質上、やはり労働者を賃労働者として奴隷的にあつかいし

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

て使役することである。今日、社会主義企業においては、労働者は企業的主人であり、彼等は革命のため、社会主義のために創造的な労働に従事し、彼等の社会主義的積極性は、彼等の階級的自覚と路線闘争の自覚からきており、決して「物質的刺激」の結果ではない。毛主席は一貫してわれわれにつきのように教えている。「政治活動は、あらゆる経済活動の生命線である」⁽⁶⁾。解放後二十余年来、われわれは、党の指導を強めることにより、マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想によって武装した労働者大衆に依拠して、労働者大衆の階級的自覚と路線闘争の自覚をたえず向上させ、社会主義企業をりっぱに管理し、社会主義経済を發展させている。ある同志は、いつも、功勞をあたえ、微罰を加えることを盲目的に信用し、これが大衆の積極性を動員するもつとも便利のいい方法であると思っている。これらの同志は、社会主義企業と資本主義企業の根本的区別を往々にして忘れ、労働者がすでに賃労働者から企業の主人に変化したことを忘れてしまっている。政治思想工作をおこなうのに比べると、功勞をあたえ、微罰を課すこのようなやり方はずっと簡単にできる。しかし、もし、このような方法で本当に問題を解決することが

できたとしても、資本主義制度はやはりなくなるはずがない。

「重要な問題はよく学ぶことにある」。(7) われわれは社会主義企業管理をりっぱにやろうとすれば、マルクス主義政治経済学をつとめて学習し、社会主義経済の発展法則をたえず研究し、把握しなければならぬ。工場と企業の指導的幹部、

管理要員が真面目に学習するばかりでなく、広範な労働者大衆も同様に真面目に学習しなければならない。労働者大衆がマルクス主義政治経済学を学習したら、労働者階級の歴史的使命を一步前進して明確に認識し、社会主義企業における自己の地位を明確に認識し、企業管理にさらに自覚的に参加しようとする。同時に、労働者大衆が社会主義経済の発展法則を掌握し、党の基本路線を掌握したら、幹部が毛主席の革命路線をあくまで執行するようにいっそうりっぱに協力し、監督することがまぎにできるであろう。もし、指導的幹部と管理要員が毛主席の革命路線から離れるなら、大衆はすぐさまそれをみやぶり、ボイコットをきつと加える。このようにして、われわれの活動に誤りをすくなくしあるいは大きな誤りを犯さないようにすることができぬ。

マルクスはつぎのように指摘している。「理論もそれが大

衆がつかむやいなや、物質的な力になる」。(8) プロレタリア文

化大革命以来、政治経済学が書齋からすでに解放されて、大衆の手のなかにあり、修正主義批判の理論的武器となつていゝ。多くの工場と企業の広範な幹部と労働者大衆は、「工業は大慶に学ぶ」の大衆運動のなかで、マルクス主義政治経済学を努めて学習し、社会主義生産関係と生産力のあいだ、上部構造と経済的土台のあいだの矛盾の当該単位における表現を具体的に分析し、人々の生産における相互関係を適切に調整し、企業管理を強化し、社会主義の経済的土台を強固にした。こう考えるなら、広範な幹部と労働者大衆の批林批孔闘争において、マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想を学習し、マルクス主義政治経済学を学習する大衆運動の深化発展は、やがて、かならず社会主義革命と社会主義建設事業のいっそうの発展を促すであろう。

宮效聞

(1) 馬克思・(資本論)第一卷。(馬克思恩格斯全集)第三卷第三六七一—三六八頁。K. Marx, Das Kapital, Bd. 1, besorgt vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag Berlin, 1969, S. 350. 長谷部文雄訳『資本論』青木書店、第一部下、五五五—五五七頁。

なお、若干付言しておけば、長谷部訳では「Diese Funktion der Leitung, Überwachung und Vermittlung, wird zur Funktion des Kapitalsのところが」指導、監督および媒介というこの機能は、……資本の機能となる」となっており、中国語訳では、「這種管理、監督和調節職能就成為資本的職能」である（訳者小野）。

- (2) 《怎樣組織競賽？》。《列寧全集》第三卷人民出版社、一九七二年版第三九五頁。レーニン「競争をどう組織するか？」『レーニン全集』第二十六卷、大月書店、四一六ページ。ただし、日本語訳『レーニン全集』では、「略奪しながら統治し、統治しながら略奪することに利益を感じる資本家のきたならしい私欲にささえられている」と訳されているが、ここでは、中国語訳にそくして訳出しておいた（訳者小野）。

- (3) 《在中国共产党第七届中央委员会第二次全体会议上报告》。《毛沢東選集》第四卷第一三二八頁。「中国共产党第七期中央委员会第二次総会での報告」『毛沢東選集』第四卷外文出版社四七六ページ。

- (4) シチヨキノはモスクワ付近の図拉市に設立された化学コンビナートである。一九六七年、ソ修がこのコンビナートではじめて所謂「工作要員が生産量の増加に関心をもち、労働生産性を向上させ、工作要員の人数をへらすことを強化する経済的な実験」をすすめた。目的は、労働者の労働強化を通じて、人員を削減し、労働生産性を向上させることを達成することである。同時に、企業の賃金フォンド総額を数年間すえおくように規定し、人員の削減によってあまった賃金フォンドは企業における一握りの特権階級支配のためにのこしておく。一九七一年六月までに、このコンビナートは、七千人あまりの人間の中から一千人ばかりをすでに解雇した。ソ修の頭目ブレジネフはつとめてこの所謂「シチヨキノの経験」をふきまくりもちあげ、大々的におしひろめるように命令している。目下、「シチヨキノの経験」はすでにソ修が労働人民を搾取する主要な形式になっている。「シチヨキノの実験」で「苦役制度」である「テイラー・システム」が採用され、労働強度と剰余価値の搾取が強められている、という見解が、中国の文献で、ではじめた。（例えば、矢吹晋訳「中国社会主义経済の理論」龍溪書舎の「国家独占資本主義こそ社会帝国主義のおもな経済的基礎である」や「ソ連の「シチヨキノ方法」とアメリカの「テイラー方式」』『北京周報』一九七五年二三号などがある。記者）

- (5) 転引自一九七二年五月三二日《人民日報》。一九七二年五月三二日『人民日報』より再引用。

- (6) 《嚴重的教訓》一文按語。《中国農村的社会主义高潮》上册第一二三頁。『重大な教訓』という文章にたいする評語『毛沢東著作選』外文出版社一九六五年（六〇五）ページ。

- (7) 《中国革命戦争の戦略問題》。《毛沢東選集》第一卷第一六二頁。「中国革命戦争の戦略問題」『毛沢東選集』第一卷、二六〇ページ。

- (8) 馬克思・黒格爾法哲学批判導言。《馬克思恩格斯全集》第一卷第四六〇頁。マルクス「ヘーゲル法哲学批判」『マルクスエンゲルス全集』①大月書店四二二ページ。

訳注

④ 両参、一改、三結合—鞍鋼憲法、すなわち「鞍山鉄鋼公司の憲法」は、毛沢東が、一九六〇年三月二十二日、大躍進における先進的な企業がつくりだした経験を総括し、ソ連の「マグニトゴルスキー鉄鋼コンビナートの憲法」に対立してつくったもので、社会主義企業経営の客観的法則を正しく反映したものである。その内容は、(一)政治による統卒を堅持し、(二)党の指導を強化し、(三)大衆運動を大いにくりひろげ、(四)両参（幹部の集団的生産労働への参加と労働者の管理への参加）、一改（不合理な規則や制度の改革）、三結合（労働者大衆、指導的幹部、技術者の三結合）を實行し、(五)技術革新と技術革命を大いにおこなうという五つの基本原則をふくむ。もっとくわしい具体的な内容は発表されていない。鞍山鉄鋼公司是、中国最大の鉄鋼コンビナートである。一九六一年に、劉少奇は、「工場長単独責任制」を含む一連の条例をつくり、毛沢東の「鞍鋼憲法」に対抗した。その一連の条例が、「工業企業七十条」である。劉少奇は「党の委員会は工場長の任務を遂行する機構であり、工場長の執務機構である」（「鞍山鉄鋼公司憲法」の勝利万歳）、「人民日報」一九七〇年三月二十四日」といったといわれる。

⑤ プロレタリア文化大革命—プロレタリア文化大革命は、一九六五年の秋頃からそのきざしがあつたが、ある日、突然おこつたものでなくて、その原因を追求すれば、すくなくとも新中国成立の時点までさかのぼることができる。今からみれば、解放後、ずっと、毛沢東の革命路線と劉少奇を頂点とする実権派の修正主義路線の対立・対抗関係は想像以上に激烈なものであつ

たのではなからうか。新中国は、政治、経済、外交、軍事、文化・教育等々のあらゆる領域において、両者の路線のきびしい対立を含みながら自国の社会主義建設をすすめてきたのである。だから、中国社会主義の諸問題を研究するさいには、二つの対立する路線を区別しながら考察しなければ、中国社会主義の真実をみきわめることはできない。国家的次元でみるのではなく、人民的次元でみなければならぬ。毛沢東は、中国あるいは中国人民の象徴的存在であるけれど、権力の実質は、劉少奇の人脈につながる実権派に相当な程度掌握されていたのではなからうか。実権のない無名の人民大衆に敬愛されること、実権をにぎっていることは別問題であつた。すくなくとも、一九六〇年の初めから文革直前にまで、劉少奇らは、人脈を利用して党中央、政府のほとんどの部門、人民解放軍の空軍、海軍の軍幹部を掌握し、実権派を形成し、その権力は絶大なものになつてゐた。中国共産党内部では、むしろ、毛は少数派であつた。このことは、毛沢東は、周恩来の援助で、北京を脱出して、上海から文革ののろしをあげざるを得なかつたということだが、この間の事情を如実に物語っている。中国の首都北京は、実権派の手に落ち、毛沢東ですら手がつけられなかつたのである（文革以後、北京の人民出版社から出版されている諸文献と、上海人民出版社からでているそれらを比較すると、政治経済学と哲学の分野では、上海人民出版社のそれらは、思想がいきいとして迫力があり何か訴えるものがありすぐれたものが多いけれど、北京の人民出版社のものは、形式通りで硬直しているように思えてならない）。プロ文革は、二つの対立する

路線のつもりにつもった矛盾を激発させたものであった。毛沢東は、人民大衆を社会の眞の主人公にするべく、革命的人民大衆を指揮し、世界革命を展望しながら、実権派に対する一大反撃にでたのである。したがって、プロ文革は、実権派にうばわれた権力を、人民大衆が、自分の権力をとりかえず奪権闘争になつたのである。したがって、プロ文革は、たんなる文化革命でも、たんなる人間革命でもなくて、政治革命である。社会主義の下での政治革命は、必然的に文化革命と人間革命ともなることはいふまでもない。マルクス・エンゲルスそしてレーニンよりも、毛沢東ほど人間革命と世界観の改造を重視した人はいない。スターリンはこの点についての配慮が欠落していた。プロ文革について、いろいろの理解があるけれど、何よりも、政治革命としての意義を理解しなければ、その真相を見失うであろう。なお文化大革命の事実経過については、各種の文献がでているので、それらを参照されたい。しいてあげれば、『無産階級文化大革命歷程紀要』（香港朝陽出版社、一九六九年）が簡潔で要を得ている。なお、ベトナム戦争との関係で文革をあつかったものに今川英一・浜勝彦著『中国文化大革命とベトナム戦争』（アジア経済出版会、一九六八年）がある。この新書版は、一読に値する。

二 企業管理は階級性をもっている

工場は何故管理をかならず必要とするのか。若干の同志は

宮效開他編著『社会主義企業管理』（小野）

いう。このような多くの人間が労働をはじめると、それぞれ分業があり、相互のあいだは一つ一つの環で結合されており、管理がなければ、生産はどうして秩序よく進行することができるか。ある同志はやはりいう。管理、管理というが、それは、どうせ生産をうまく管理する理論にほかならず、それは、規模の比較的大きな生産的労働の必要からきており、生産を組織し、調整する手段である、と。このような見解は正しいのか。

マルクスは『資本論』のなかでつぎのようにのべたことがある。「大きな規模で行われる直接に社会的または共同的な労働は、多かれ少かれ或る指揮を必要とするのであって、この指揮により、個別的諸活動の調和が媒介され、全生産体の——その自立的諸器官の運動と区別される——運動から生ずる一般的諸機能が遂行されるのである」。マルクスはさらにオーケストラは指揮者を必要とするという比喻をもって、管理は、人々の共同的労働の客観的な必要からきており、管理は生産の発展と密接に関連していることを説明している。しかし、マルクスはすぐひきつづきまたこのようにのべている。「指導・監督および媒介というこの機能は、資本に従属させ

られた労働が協業的となるや否や資本の機能となる。資本の独自の機能としては、指導という機能が独自の特徴を受けとる」。マルクスは、ここで、資本主義管理の階級的性質、すなわち、資本の機能は、資本家が、彼等が占有している生産手段を利用して賃労働者に対して搾取の機能をすすめることにはかならない、と明確に指摘している。資本主義管理のこのような性質は、資本主義的生産関係により決定される。事實上、資本主義工業の発展は、単純協業、マニユファクチュア、機械制大工業等々のいくつかの歴史的段階を経て、生産技術、生産の協業そして労働組織は非常に大きく変化し、生産力の水準も非常に大きく向上し、企業の管理形式もこれにしたがい非常に大きく変化した。しかし、資本主義企業の管理の階級的性質は、このことにつれて決して変化しておらず、それは、始めから終りまでレーニンがつぎのように指摘しているようなものにしかならない。「資本家が関心をもっているのは、どのようにして略奪しながら統治し、どのようにして統治しながら略奪するのかということである」。したがって、資本主義企業においては、管理、管理といったところで、どのみち、資本家が労働者を搾取する手段である。

プロレタリア革命の教師の資本主義企業に対する分析によつて、つぎのようなことをわれわれは理解することができる。すなわち、階級社会においては、超階級的な企業管理は存在しないということ。企業管理は、いつも階級的な性質をもち、いかなる階級が管理権を掌握し、運用し、いかなる階級の利益のために奉仕するのかという問題である。どのような生産手段所有制をもつかということが、すなわち、どのような性質の企業をもつかということであり、また、どのような性質の管理をもつかということである。これは、企業管理問題を研究する基本的な出発点である。われわれが資本主義企業管理を分析するさいに、この点から離れることはできず、われわれが社会主義企業管理を認識するさいにも、同様にこの点から離れることはできない。

社会主義企業においては、プロレタリア階級と労働者大衆が主人になっており、企業を管理する権力を掌握している。この時期の企業管理は、専門機構を強化し、「五大管理」をりっぱにおこない、「七項制度」を健全にさえすればそれだけでよいということができるのかどうか。いうことはできない。「マルクス主義者は、階級関係の分析という厳密な基盤

からはなれないようにしなければならない⁽¹⁾。」「五大管理、

「七項制度」についていうなら、これらの管理制度は、人と人とのあいだの関係を直接反映しており、生産関係と相互に関連している。若干のものは、生産技術が必要とするところのものであり、生産力の要求を反映しているけれど、しかし、これらの管理制度は、どのような人間により制定され、どのような人間により執行されるかは、やはり、人と人とのあいだの關係の問題に必然的にかかわっている。社会主義社会においては、なお、階級、階級矛盾そして階級闘争が存在している。人と人とのあいだの關係には、階級の刻印がうってないものではなく、一定の階級關係をいつも反映しなければならぬ。もし、われわれが、生産を組織し、指揮することからだけ社会主義の企業管理をみるならば、それは、管理の階級的内容を捨象することにはかならず、社会主義企業と資本主義企業の二種類の異なった管理の階級的性質をはつきりとみわけることができず、社会主義企業管理をかたよった方向へたやすく行かせる。

企業管理はいつも階級的性質をもつというこの基本的観点から出発するなら、社会主義企業の管理をりっぱにおこなう

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

には、まず、党の基本路線を堅持し、二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争をすすめ、プロレタリア階級の指導権を強固にし、企業を社会主義の方向にそって前進せしめなければならぬ。歴史的事実はわれわれにつきのことを教えている。生産手段所有制の社会主義的改造が基本的に達成した後、プロレタリア階級が社会主義生産關係を強固にし完璧にしようにとし、ブルジョア階級が社会主義生産關係を腐敗させ、破壊しようとする、このような闘争は、一刻一刻と進行している。旧制度はうちたおされたけれど、しかし、「ふるい制度を反映するふるい思想の残りかすは、なんといつても長いあいだ人びとの頭に残るもので、そうやすやすとひきさがりはしない⁽²⁾」。社会主義企業はこのような實際的環境の中にあり、社会的生産は階級闘争が依然として存在する条件の下で進行しており、それは、企業管理の上にあられざるをえない。

解放以来、劉少奇、林彪のたぐいの修正主義者は、企業管理の上で、かつて、何回も、プロレタリア階級にでたらめな攻撃を加えた。彼等が修正主義の「企業長制」、「専門家による工場支配」、「物質刺激」、「利潤による統卒^④」等々の修正主義の黒いしろものを販売するのは、企業の管理を手にいれ、

企業管理の指導権をかすめとり、企業管理の社会主義的原則を改変することを通じて、社会主義企業をして資本主義企業に脱皮させる目的を達成しようとするくらむことにはかならない。林彪はなお孔老二の所謂「君子懐刑、小人懐惠」という謬論をまねし、彼等の仲間が法を制定し、広範な大衆はいずれも小利をむさぼる人間で、ただ彼等の管理を受けることができるにすぎないと鼓吹した。これは、公然と勇氣をだして「圧迫には道理がある」ということを鼓吹することにはかならない。劉少奇、林彪の反革命修正主義路線の害毒の下に、一時期たしかにある、一部分の工場の指導権はブルジョア階級及びその党内の代理人によりかすめとられた。これらの単位は、形式上社会主義所有制であるが、実質上、だんだん変質していた。プロレタリア文化大革命を経て、プロレタリア階級はこれらの単位の指導権をかさねて自分の手に奪回し、企業管理の方向をたしたが、これは偉大な勝利である。

しかし、プロレタリア階級の工場と企業に対する指導権は、すでに完全に解決されたかどうか。企業管理の上に反映している二つの道の路線闘争は終結したのかどうか、終結していない。階級と階級闘争が存在するかぎり、企業管理上での二

つの道の路線闘争は永久に収束しない。このような状況の下では、社会主義企業管理は、鮮明な階級性をもっており、それは、プロレタリア階級と労働者大衆の利益に奉仕することを、再三おおびらに主張している。毛主席がみずから制定した「鞍鋼憲法」は、社会主義企業管理のために明確なる方向をさししめした。社会主義企業管理は、結局帰するところ、プロレタリア階級が自己の権力を活用して、社会主義の原則により、正しく人と人とのあいだの関係を処理し、團結することのできるあらゆる力と團結し、共同でブルジョア階級に反対し、社会主義公有制をうちかため、社会主義生産を發展さす一つの手段である。批林批孔運動の深化は、政治、経済、文化等々の各分野において、いずれも路線問題と連繫している。マルクス主義をやるのかそれとも修正主義をやるのか、社会主義の道を歩むのかそれとも資本主義の道を歩むのか、これは、もっとも重要な問題である。企業管理の分野においてもかくのごときである。もし、われわれが、工場と企業に対するプロレタリア階級の指導権をうちかため、強化せず、ブルジョア階級を批判し、修正主義を批判することを企業管理の根本的内容とせず、生産業務は生産業務にしかすぎない

いと論じるならば、それは、社会主義企業管理のプロレタリア階級の性質をまつ殺し、企業管理を別の方向にそらせることになりうる。

社会主義企業管理はかならずまず路線をつかみ、方向をつかまなければならないということは、決して、管理の具体的活動をつかまなくてよろしいということではない。しかも、かならず路線闘争をカナメとしなければならないということは、社会主義の方向を堅持するという前提の下に、企業管理の各項の具体的活動をまじめにりっばにつかむことである。

社会主義企業管理は、数多くの側面をふくみ、計画管理、生産管理、労働管理、技術管理、財務管理、物財管理、生活管理等々のようなどれも皆、これらの活動は、いずれもどうしてもやらなければならないことである。だが、これらの活動のなかで、もし、どのような路線を行使し、どのような道を歩むのかという問題をまずつかまなければ、りっばにやれないのは当然である。個々の社会主義企業が、全面的に国家計画を行使するのか、それとも生産額、利潤を一面的に追求するのか、人民に責任を負い、生産物の品質をたえず高めるのか、それとも、品質を軽視し、粗製濫造するのか、経済採算

を堅持し、節約勤儉をするのか、それとも大ざっぱで、かざりたて浪費するのか、社会主義の協業精神を発揚し、便利さを皆にわたせるのか、それとも個人主義で、大局をかえりみないのか？、これらすべては、いずれも、単純な業務問題ではなくて、どのような路線を行使するのかという問題である。同様に、各項の管理制度をあくまで実行するとき、大衆を信頼し、大衆に依拠し、企業における人と人との相互関係を正しく処理するのか、それとも物だけを見て、人間をみずに、制度は制度をつかむとして、たんに行政命令によりかかって仕事をするのか、これも単純な業務問題ではなくて、いかなる路線を行使するのかの問題である。いずれも、事柄は二つの路線と、二つの道にかかわる大きな事柄である。党の基本路線によって指導をおこない、二つの階級、二つの路線闘争のカナメをつかむことによってのみ、企業管理の実質をつかみ、全局的なものをつかみ統括し、大事をつかむことができる。また、階級矛盾と階級闘争の問題を正しく処理し、当面、とくに、批林批孔というこの第一級の大事をつかみさえすれば、企業におけるいろいろの矛盾も正しく処理することができ、われわれの革命と生産もいきいきとした活潑な盛大な現象を

うみだすことができる。

吳淞化学工業 江揚南

(1) 論策略書。《列寧全集》第二四卷第二六頁。レーニン「戦術にかんする手続」『レーニン全集』② 大月書店、三〇ページ。

(2) 毛主席・《嚴重的教訓》一文按語。《中国農村的社会主义高潮》上冊第一二三頁。「重大な教訓」という文章にたいする評語「中国農村における社会主义の高まり」の評語選、『毛沢東著作選』外文出版社六〇五ページ。

訳注

④ 劉少奇の所謂「六つの論」(六論)は、一階級闘争消滅論、二従順な道具論、三大衆立ち遅れ論、四入党出世論、五党内平和論、六公私融合論であつて、ここにあげられている「企業長制」(ソ連の企業管理の制度を模倣したもの)、「専門家テクノクラート」により工場支配、「物質刺激」、「利潤による統卒」等々とともに、劉少奇がまきちらした黒いしろものといわれ批判されている。

三 管理もまた社会主義教育である

社会主義企業管理の問題について、毛主席は、かつて、「管理もまた社会主義教育である」⁽¹⁾というたいへん重要な指示をだした。毛主席のこの指示は、社会主義の時期の階級闘争の

客観的法則により、社会主義企業管理の実質を概括し、われわれが社会主義企業管理をりっぱにおこなうための方向を明示した。

社会主義企業管理は、社会主義生産関係の要求を表現することによつてのみ、はじめて生産力の発展を促進することができる。しかし、社会主義企業管理もまた社会主義の上部構造の作用とせきはなすことはできない。「管理もまた社会主義教育である」ということについての毛主席の指示は、上部構造の役割を重視し、経済的土台にかんする活動をするにもまた上部構造を理解しなければならず、企業管理を強化し、生産力の発展を促進するためには、社会主義教育をつかむことを通じてでなければならない、ということをわれわれに教えている。

毛主席は、つぎのことをわれわれに教えている。「社会主義社会においても、基本的な矛盾は、やはり生産関係と生産力とのあいだの矛盾、上部構造と経済的土台とのあいだの矛盾である」⁽²⁾。我国において、生産手段所有制の社会主義的改造が基本的に完了したあと、生産関係と生産力のあいだ、上部構造と経済的土台のあいだに、照応するという基本的側面

以外に、依然として矛盾する一面が存在する。社会主義社会の基本矛盾の階級的表現は、プロレタリア階級とブルジョア階級のあいだの矛盾と闘争にはかならない。このような階級矛盾と階級闘争も、企業管理のなかに必然的にあらわれてくるであろう。「管理もまた社会主義教育である」は、まさに、企業管理の領域における階級闘争と路線闘争をつかまなければならず、社会主義企業管理と資本主義企業管理のあいだの境界線をはっきりひかなければならないとわれわれに教えている。社会主義企業は、プロレタリア階級と広範な労働人民が階級闘争、生産闘争と科学実験の三大革命運動をおこなう陣地である。プロレタリア階級は、この陣地を利用して、精神と物質の両側面において共産主義を実現するための条件を創出し、ブルジョア階級の方は、われわれの企業のなかにおいて、資本主義の復活を実現さす陰謀をたくらむであろう。プロレタリア文化大革命を経て、企業管理の面に、多くの革命的な新生の事物が出現した。また、ブルジョア階級の野心家、陰謀家、林彪こそは、プロレタリア文化大革命のなかでわきでてきた新生の事物に対して、陰險で悪辣にあくたいをつき、「克己復礼」をたくらみ、逆流復活をたくらんだ。こ

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

ことから、企業管理においては、生産技術の問題を解決するにしろ、経済業務問題を解決するにしろ、いずれも、プロレタリア文化大革命の成果に対して肯定するかそれとも否定するか、プロレタリア文化大革命に出現した新生の事物に対して支持するかそれとも反対するかの問題を考慮しなければならぬことは、また、いずれの階級の利益に奉仕し、どのような道を歩み、どのような路線を實行するかの問題にはかならない。われわれが企業管理をつかむことは、決して実務についての是非を論じることでなく、上部構造をつかみ、階級闘争と路線闘争をつかむことでなければならず、また、幹部と労働者がマルクスレーニン主義、毛沢東思想を学習するのを組織し、思想と政治路線面での教育を強化し、何が社会主義で、何が資本主義であるか、何がプロレタリア階級が企業を經營する路線であり、何が修正主義が企業を經營する路線であるかを大衆にはっきり識別するようにすることできればならない。このようにしてはじめてブルジョア階級の侵蝕を抑制し、企業の指導権がマルクス主義者と労働者大衆の手中に真に掌握されることが保証され、もって、社会主義の経済的土台をたえずうちかため、社会的生産力を發展させ

ることができらる。

社会主義生産関係の重要な構成部分ひとつは、人々の生産における相互関係である。社会主義の工場と企業においては、人々の生産における相互関係は、広範な労働人民と一握りの搾取分子の関係を除いて、大きくは、労働人民相互間の関係である。「管理もまた社会主義教育である」とは、われわれが企業管理において、広範な労働人民と団結し、資本主義と修正主義活動をたくらみすめる資本主義の道を歩む若干のグループとすべての牛鬼蛇神との闘争を展開し、一握りの搾取階級分子を、自分で生活する労働者に一步一步改造し、労働人民と一握りの搾取階級分子のあいだの矛盾を正しく処理することを要求することにはかならない。また、それは、われわれが企業における労働人民の内部矛盾を正しく処理し、広範な労働人民の社会主義的積極性を十分動員し、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義生産を發展させることを要求する。

社会主義の工場と企業において、労働人民のあいだの関係は、主に、指導者と大衆とのあいだの関係、管理要員、技術要員と労働者大衆のあいだの関係である。生産手段の社会

主義公有制が打ちたてられたことにより、企業の指導者と大衆のあいだの関係、管理要員、技術要員と労働者大衆のあいだの関係は、根本的利益の一致という基礎の上に日ましに發展しているところの同志的關係である。しかし、このことは、決して、彼等のあいだで矛盾がなくなつたということではない。ブルジョア階級の思想上の影響により、指導要員、管理要員、技術要員と労働者がすわっているところの地位のちがいに、若干の指導要員は、一定の条件の下で、社会主義の原則から離れて、彼等と大衆のあいだの関係を処理することがありうる。彼等は、あるいは、職権を利用して、特殊化をおこない、あるいは労働に参加せず、お高いところにつつとおり、いかめしい格好をし、あるいは、独断専横、民主を圧迫し、人を不平等にあつかい、同志関係を支配と服従の關係にかえる。若干の管理要員と技術要員は、ブルジョア階級の世界観が根本的に改造されていないことにより、活動において、大衆を信頼せず、大衆に依拠せず、事があつても大衆と相談しない等の状況もまたあらわれうるのである。これは、指導者と大衆のあいだ、管理要員、技術要員と労働者のあいだの矛盾をかならずひきおこすことになる。これらの矛盾は、

一般的にいつて、人民内部の矛盾に属し、非敵対的性質のものである。しかし、もし、適切に正しく処理することができないなら、大衆が工場と企業の主人であるとする革命精神をくじき傷つけずして圧迫することになりうる。これが発展していくと、労働者は、工場を自己のものであるとみなさず、指導者あるいは管理要員のものとみなし、指導要員、管理要員、技術要員は労働者とのあいだに尖锐な対立状態をもたらすことになる。

社会主義教育運動^①において、とくに、今回のプロレタリア文化大革命において、若干数の幹部が大衆の批判を受けることになった所以は、一つは、彼等がブルジョア階級の反動路線を實行したことに、大衆が腹をたてたこと、さらに彼等がまったく大衆から離脱し、大衆とのあいだを処理する関係の上で社会主義の原則に違反し、大衆が批判をもつたことにはかならない。このような批判は、一つの深刻な社会主義教育である。これらの幹部は、批判と教育を経て、大多数は、変わり、大衆との関係を真面目に改善し、大衆の監督を虚心にうけいれ、したがって、多くの企業に、「幹部と大衆の心が一つになり、上と下の団結が緊密になる」いきいきとした活気

のある局面が出現した。多くの企業の指導者と大衆、管理要員、技術要員と労働者の社会主義自覚は非常に大きく高まり、彼等のあいだの関係は一步一步改善されて、このことよって、社会主義企業管理もまた管理の仕方がさらによくなった。これらの事実とは、つぎのことを証明している。「管理もまた社会主義教育である」ということにかんする毛主席の教えにしたがい、人々の相互関係を上手に正しく処理すれば、社会主義企業はやればやるほどりっばになることができる、と。

しかし、プロレタリア文化大革命の成果を否定することをたぐらみ、プロレタリア文化大革命中に出現した革命の新生の事物を敵視する、ごく少数の人間がおり、このような人間は、かならず、企業管理を復活逆行への邪悪な道にひきこもうとしている。これは、明確にしなければならない是非の問題であり、批林批孔闘争を通じて、解決を加え、企業を革命の軌道に沿ってつづけて前進させるようにしなければならない。

歴史的経験は、われわれにつきのことを教えている。企業管理活動は、数多くの専門的業務をもち、計画管理、生産管理、労働管理、技術管理、財務管理、物財管理、生活管理等々を包括しており、各項の管理のなかにまた数十項、数百項

の具体的活動をもっている。これらの活動はかならずやらなければならないし、また、かならずりっぱにやらなければならない。しかし、これらのすべての活動は、結局帰するところ人と人との関係と連繫しており、いささかも人と物との関係では決してない。このことから、われわれは、社会主義の企業管理を強化し、物を見るだけで人間をみないのはためて、社会主義の原則により、人々の相互関係、とくに幹部と大衆との関係を完璧にたえず改善しなければならない。企業内部の人びとのあいだの社会主義相互関係をうちたてそして発展させるためには、企業管理の上で、かならず、「鞍鋼憲法」の各項の原則をあくまでつらぬき、幹部が労働に参加し、大衆が管理に参加し、不合理な規則と制度を改革し、労働者、幹部と技術要員の三結合を實行しなければならない。

社会主義教育運動は、階級闘争の問題を含むばかりでなく、幹部が労働に参加する問題を含み、厳格な科学的態度をもちいて、経験を通じて、企業と事業における一連の問題を解決することを学ぶというこのような活動を含んでいる。社会主義教育を通じて、「我々の幹部に政治もわかり、業務もわかり、紅でもあり専でもあるようにせしめ、大衆から離れて、上

に浮いて、役人になり旦那になるのではなくて、大衆と一体となり、大衆の擁護を受ける真正のりっぱな幹部になるようにさせなければならない⁽³⁾。企業管理は、社会主義教育の精神をつらぬくことよつてのみ、はじめて、ブルジョア階級の影響をはねのけ、はききよめ、幹部と大衆とのあいだの戦闘的団結をたえず強化することができ、官僚主義を克服し、修正主義と教条主義を防止することができる。幹部と大衆との関係の処理の仕方がよければ、各項の管理制度も容易に貫徹することができる。これに反して、幹部と大衆のあいだの関係の処理の仕方がまずければ、制度がいくらよくても役に立たない。同様に、工場と企業の指導要員、管理要員、技術要員が、もし、長期的に労働に参加せず、生産現場、小組(中国語のまま訳者)にいかず、労働者と一体にならず、労働者を先生とおおがず、彼等から若干の技法を学ばず、技術をマスターしないで、長いあいだ素人であれば、このような管理もまた本当にりっぱにやることができないのである。

総じて、社会主義企業管理は、党の基本路線にそくして指導し、上部構造をつかみ、イデオロギーをつかみ、人々の生産における相互関係を正しく処理し、もつて、社会主義の経

済の土台をうちかため、発展させなければならない。かくして、社会主義生産関係のたえざる発展と完璧さが、また、かならず社会的生産力の発展を大だ的にまさに促進するのである。

上海モーター工場 倪妙章

(1) 転引自一九六二年八月一四日『人民日報』。一九六二年八月一四日『人民日報』より再引用。

(2) 『關於正確處理人民内部矛盾的問題』。『毛沢東著作選読』

(甲種本) 人民出版社一九六六年第三三六頁。「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」『毛沢東著作選』外文出版社、六二四ページ。

(3) 転引自一九七三年七月二四日『人民日報』。一九七三年七月二四日『人民日報』からの再引用。

訳注

④ 社会主義教育運動—この運動は、一九六二年九月に開かれた第八期中央委員会第十回総会（八期中全会）以後、毛沢東の指導によって、全国の都市と農村で展開された革命運動である。それは、政治をきよめ、思想をきよめ、組織をきよめ、経済を清めることを内容としており、そのため「四清」運動とも称される。この運動は、プロレタリア文化大革命の前史的意義をもっていた。

一九五六年の生産手段所有制の社会主義的改造が完了してから、プロ文革がはじまるまでの過程を年表風にごく簡単に記述すれば、一九五八年の三面紅旗（総路線、大躍進、人民公社）の政策、五九年から三年間連続の自然災害、六〇年のソ連の経

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

済技術援助の一方的破棄、六一年から六四年までの所謂調整期、六五年秋からのプロ文革のはじまり（プロ文革の開始の時期をいつにするかには問題があるが、一応このようにしておく）ということになる。じつは、この調整期のあいだに、当時の中国社会に、中国経済の困難につけてこんで反革命的な消極的側面が顕著にあらわれてくる。一九六三年五月二〇日の「当面している農村工作のなかの若干の問題についての中共中央の決定」（十カ条）の（3）現在中国社会にあらわれている重大な尖鋭な階級闘争の状態は、農村における反革命的様相をのべている。いわく、農村における旧地主富農による権力復活のくわだて、手段を弄して幹部を腐敗させ指導権をうばったり、封建的な同族支配体系の復活活動（公共財産の破壊、情報の盗み、殺入放火など）、商業での闇取引、高利貸し、土地売買などの現象、新しいブルジョア分子の投機や搾取による金もうけ、機関のなかや集団のなかにも、多くの汚職、窃盗分子、投機、闇取引分子など、地主富農と結託して……云々。また都市では、「両参一改三結合」による社会主義企業経営が骨ぬきになされて、工場長や技師による工場支配があらわれ、経済主義、個人主義、専門家主義が主張された。一九六一年五月から六二年六月の一年間に、劉少奇は中央と地方の会議の席上で、「経済は均衡をうしなっている」とか、所謂経済の一時的困難を「三分が天災で、七分が人災である」とかいて三面紅旗の政策を批判したり、「三自一包」を主張したり、「資本主義のはんらんを恐れてはならない」、「自由市場はこれからもやっっていくべ

きた」「工業面では十分に後退し、農業面では包産到戸や単独経営を許したりするところまで、十分後退すべきだ」といったりした。また、古典的な京劇の復活などがあらわれた。一九六二年八月劉少奇の「共産党員の修養を論ず」（マルクス主義の真髓プロ独裁を否定したもの）が大々的に再版される。一九六一年にソ連共産党第二回大会がひらかれ、「全人民の国家」、「全人民の党」といういっさいの矛盾を否定したおそろしい理論が採択され、資本主義復活路線を明確にした。中国社会の以上のような現象は、国際的な逆行現象の一環であった。このような情勢をみて、毛沢東はやりきれない気持であつたろう。しかし、毛沢東は、革命家として、断固たる決意でもって、これらの逆流をせきとめなければ、中国革命のみならず世界革命に甚大なる損害をあたえる、と考えたにちがいない。毛沢東はつぎのようにいつている。「このたびの闘争は、人間を教育しなおす闘争であり、改めて革命的隊列を組織しなおし、われわれに気遣いじみた攻撃をしかけている資本主義勢力や封建勢力と鋭く対決する闘争であつて、これらの反革命の気炎をおしつぶしていくものである」。

このような背景の下に、毛は、社会主義教育運動の指揮をとり、劉少奇などの実権派の路線に対決していく。しかし劉少奇らは彭真といっしょになつて、一九六三年九月形は左だが、実際は右の（後の十カ条）（農村の社会主義教育運動のなかでの若干の具体的な政策の問題についての規定（草案）をつくり、毛沢東の十カ条に直接対抗し、二つの階級、二つの道の闘争という根本内容をぬきさり、社会主義教育運動の性質を「四清と

四不清の矛盾」などと歪曲して、闘争の方向をそらそうとした。（一九六六年一〇月の党中央工作会議において劉はこの点について自己批判したといわれる）。毛沢東は、これは、大勢に打撃をあたえ、ひとにぎりを保護する反動路線であるとして、一九六五年一月に、中共中央政治局召集の全国工作会議を開き、「農村の社会主義教育運動のなかで当面提起されている若干の問題」すなわち、二十三条からなる社会主義教育運動にかんする決定をつくり、農村における社会主義教育運動をいっそう発展させようとした。上記の決定の（2）「運動の性質」によれば、「今回の運動の重点は、党内で資本主義の道をすすんでいる、あの実権派を清掃し、都市・農村の社会主義の陣地をいっそう強固にし、発展させることにある。これらの実権派のなかには、舞台にあがっているものもあり、舞台裏にいたるものもある。これらの実権派を支持するものは、下部におれば、上部にもいる。下部にいるものとしては、すでに分類されている地主・富農・反革命分子・およびその他の腐敗分子があり、分類からめれた地主・富農・反革命分子およびその他の腐敗分子がいる。上部にいるものとしては、人民公社・区・県・専区から、省や中央の部門で活動しているものにおいてさえ、社会主義に反対するものが一部いる。そのなかには、もともと階級的異分子であつたもの、変形変質したもの、わいろをとつたり悪者との結託して法規を破つたりしているものもある」（《中国社会主義教育運動重要資料特集》一九六七年中・下旬号「アジア経済旬報」所収。六九ページ）といっている。ここで注目しておくべきことは、運動の重点は、資本主義の道を歩む例の党内実権

派をたたくことにある、ということ、その党内の実権派が省や中央で活動して上部に居ることである。このとき、すでに上部にいる党内実権派とは、劉少奇をさしていたのである。都市においては、文化領域（哲学、文芸、美術、映画など）の修正主義的潮流に対して、毛沢東は批判を開始し、それは、党中央宣伝部、政府文化部にまで及ぶのである。が、劉少奇などの党内実権派は、毛沢東路線による反撃を必死でくいとめていくのである。このことは、毛沢東のつぎのような言明によってもわかる。「これまで、われわれは農村での闘争、工場での闘争、文化界での闘争をおこない、社会主義教育運動をすすめてきたが、しかし、問題を解決することができなかった。なぜなら、公然と、全面的に、下から上へと広範な大衆をたち上がらせて、われわれの暗い面をあげたようなひとつの形態、ひとつの方式を見つけたせなからである（一九六七年二月）。暗い面をあげたような形態とは、いうまでもなくプロレタリア文化革命である。プロ文革によって、社会主義教育運動によって解決できなかった問題Ⅱ党内の例の資本主義の道をあゆむ実権派をたたく問題を解決することが可能になった。

四 制度は大衆が積極性を發揮するのに

有利でなければならぬ、

不合理な規則と制度を改革し、合理的な規則と制度をうちたて、健全にすることは、社会主義企業管理の重要な内容で

宮效閑他編著『社会主義企業管理』（小野）

ある。何を基準に、規則と制度が合理的であるかあるいは不合理であるかはかるのか。毛主席は、「制度は大衆に有利でなければならぬ」と精密に概括している。このことは、規則と制度が、広範な大衆の社会主義的積極性を發揮するのに有利であるかどうか、それが合理的であるかないかを検証する基準である。

企業の規則と制度は、大衆の社会主義的積極性を發揮するのに有利でなければならぬということ、これは、社会主義生産関係の性質によって決定されるものである。生産の社会化されたいかなる企業も、いずれも一定の規則と制度をうちたてなければならず、そして、いかなる規則と制度も、一定の生産関係の下に制定されたものであり、そして、最終的に一定の生産関係を反映している。資本主義企業においては、資本家の唯一の動機と目的は、最大限に労働者のつくった剰余価値を搾取することである。資本家と労働者の関係は完全に支配と被支配の、搾取と被搾取の関係である。資本主義企業の規則と制度は、資本家が労働者を支配し、搾取する手段であり、労働者をしばる眼に見えない太い綱である。このことから、それは、資本家に有利になりうるだけで、労

働者には不利である。社会主義社会においては、プロレタリア階級と労働人民が国家と企業の主人となり、社会的地位に根本的な変化をもたらした。「大衆のなかにはきわめて大きな社会主義的積極性がひそんでいる」⁽¹⁾。社会主義企業の規則と制度は、広範な大衆の願望と要求を反映しなければならず、彼等の積極性を十分に発揮せしめることができる。

過去に、若干の企業の幹部は、劉少奇の修正主義路線の影響を受けて、少数の管理要員と技術要員に依拠するのみで、「門を閉じて車をつくる」式に煩瑣な条文をつくり、規則と制度により、人間を「管理し」、生産を「管理」することを意図する。たとえば、若干の鑄物企業がつくった作業規則は、「まったく焼けた鉄は、やっそここではさまなければならぬ」と規定している。これは何んとかげた話ではないか！ある自動車運輸単位は、車輛製作に対して、所謂「音楽演奏製作法」をつくって、労働者がレコードのリズムによって三六〇項目を完全にしおわるようにしなければならぬと規定している。これは、労働者に口をふさぐことでなくて、何であるのか！このような規則と制度は、本質上からいえば、それは、資本主義企業の規則と制度の変形であって、社会主

義生産関係と根本的に矛盾するものである。その外に、過去の若干の規則と制度は、内容からみれば、基本的には、生産の必要に照応しているけれど、往往にして、非常にうまくつらぬくことができず、はなはだしきは労働者大衆の反対を受けたが、これはまた何の原因によるのか。これは、これらの規則と制度を制定するとき、若干の幹部は大衆の自覚を信頼せず、労働者を規則と制度の主人とみなさずに、物をみて人間をみず、労働者を管理される対象とし、事前に大衆と相談しない上、実行するときにもなお思想政治工作をせず、何かの制度に依存して人間をしっかりと管理して動きのとれないようにしていることによる。このようにすれば、大衆の社会主義的積極性はまったくくじかれ、当然、大衆の反対にあらうであらう。このことから、規則と制度を制定し、実行する過程は、かならず、大衆を動員し、大衆に依拠し、「大衆のなかから、大衆のなかへ」という過程でなければならない。このようにすることによってのみ、規則と制度ははじめて深みのある大衆的基礎をもつことができる。

企業の規則と制度は、大衆の社会主義的積極性を発揮するのに有利であるかどうか、これが、その性質が、社会主義で

あるかそれとも資本主義であるのかを区別する重要な指標である。どのような規則と制度をうちたてるのかという問題について、毛主席の革命路線と劉少奇、林彪流の修正主義路線との闘争が存在している。林彪は「上智下愚」の觀念論史觀をもちあげ、一貫して、労働人民が、「思うことは、どのようになりにゼニをもりけ、どのように米、油、塩、味噌、酢、しばをつくるのかということである」とあなどっている。このことから、この問題について、闘争の実質は、大衆を信頼するのか、それとも大衆を馬鹿とみなすかであり、大衆に依拠するか、それとも「専門家が工場をおさめる」のかであり、帰するところ結局、社会主義の道を歩むのか、それとも資本主義の道を歩むのかという問題である。このことから、制度が大衆に有利であるかどうか、これは工作方法の問題でなくて、路線問題である。

大衆に有利である規則と制度があつてこそ、生産を有利にすることができ、大衆に有利であることと生産に有利であることは統一している。制度は拘束力をもち、大衆に有利になることは不可能で、生産に有利になりうるのみで、したがって、大衆に有利になることと生産に有利になることを対立

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

していると考えすることはできない。生産はいつでも大衆の生産であり、大衆から離れて何らの生産も語ることにはできない。「人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である」⁽²⁾。社会主義企業の規則と制度は、一定の拘束力をもち、一度確定すると、改革されるまでは、全体が皆自覚的に遵守しなければならぬ。このような拘束力は、主に、ブルジョア階級の思想と行動に対する拘束であり、同時にまた生産活動を調和させる必要でもある。合理的な規則と制度は、局部と全体部門と部門のあいだの関係を比較的正しく反映し、全生産活動を調和せしめる。広範な大衆はこれらの制度を遵守し、それによって自己を拘束することは、まさに、また、多くはやく、むだなく、りっぱに社会主義を建設するためであり、したがって、帰するところ結局、やはり、広範な大衆に有利になるのである。

「卑賤なものがもつとも聰明で、高貴なものがもつともおろかである」⁽³⁾。合理的な規則と制度は、大衆の実験的経験の総括であり、生産技術の法則の反映である。したがって、それは、大衆の要求を反映したものであり、大衆が自覚的に遵守することができるものである。しかし、いかなる規則と制

度も、いつも、人々の主観的なもので、それを客観的法則に適合せしめなければならず、決して、一回で認識が完成するものではない。そして、客観的事物はたえず発展しており、人間の認識も同様にそれによって発展しなければならぬ。規則と制度の合理性は絶対的でなくて、相対的である。

大衆の実践が豊富になり、人々の認識が深化し、客観的事物が発展するにしたがつて、もともと合理的なものも、不合理にあるいはまったく合理的でないものに転化することになりうるし、大衆の社会主義的積極性を發揮するのに不利になる。こうなれば、適切に修正と改革を加える必要がある。大衆をたえず動員し、そのときどきに実践的経験を真面目に総括し、完璧でないそれらの規則と制度を一步一步完璧なものにし、もって、社会主義生産過程における人びとの相互関係をたえず完璧にし、これによって、生産の発展を推進することは、たいへん必要なことである。

合理的な規則と制度は、人間により制定されたものであり、人間によりあくまで執行されるものである。人間と制度との関係は、人間がいつも第一位である。このことから、合理的な規則と制度をもったとしても、これについて万事まったく

よしと思うことはできない。「政治工作は、あらゆる経済工作の生命線である」。思想政治工作をつよめることによってのみ、合理的な規則と制度も、はじめて生命力をもち、それがもたなければならない作用を發揮することができる。

楊穎順

(1) 毛主席 《這個鄉兩年就合作化了》一文按語。《中国農村の社会主義高潮》中冊第五八七頁。『この郷は二年間で協同化された』という文章にたいする評語。『中国農村における社会主義の高まり』の評語選。『毛沢東著作選』外文出版社五九六ページ。

(2) 《論連合政府》。《毛沢東選集》第三卷第九三二頁。「連合政府について」『毛沢東選集』第三卷 外文出版社 二九六ページ。

(3) 毛主席語録。転引自一九七〇年六月四日《人民日報》。毛沢東語録。一九七〇年六月四日『人民日報』から再引用。

訳注

④ 「大いに意気こみ、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設する」という社会主義建設の総路線は、新中国成立以来の社会主義建設の歴史的経験を一九五八年毛沢東が概括し、制定したものである。「大いに意気こみ、つねに高い目標をめざす」(敢足干劲、力争上游)とは、人々の革命的精神と共産主義的労働の態度を意味している。「多く、はやく、りっぱに、むだなく」(多快好省)は、弁証

法的意義をもっている。社会主義建設の総路線は、生産物の量、質、種類、節約の統一を要求している。「多」と「快」は対立面の統一であり、「好」と「省」も、対立面の統一であり、そして、「多快」と「好省」のあいだも対立面の統一である。「大いに意気こみ、つねに高い目標をめざす」は、人間の精神的状態であり、主観能動性であり、「多く、はやく、りっぱに、むだなく」は、物質を意味するから、前者と後者も、すなわち、精神と物質のあいだの唯物証法の統一である『毛沢東思想萬歳』一九六九年八月、原文覆刻版現代評論社。第二七八頁を参照のこと。また『質量問題は個路線問題』人民出版社一九七二年所収の各論文参照のこと。

五 規則と制度をうちやぶることのうちたてること

規則と制度をうちやぶることのうちたてることにかに正しく対処するかは、企業管理においてつねにであらう問題である。この側面の経験を真面目に総括することは、われわれが社会主義企業管理活動をつねにおこなうにあたって、たいへん必要である。

二十余年来、われわれのきわめて注目している現象が存在した。すなわち、それは、社会主義革命が高揚すること、企業の規則と制度がいつも大なり小なりの衝撃を受けるとい

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

うことであつた。生産手段所有制の社会主義的改造が基本的に勝利を獲得したあと、このような衝撃がやはり何回かあつた。比較的大きなものは、一九五八年の大躍進期がその一つであり、「四清」もその一つであり、そしてプロレタリア文化大革命が、今回で、とくに広範で、深刻である。革命的大衆運動のほこ先がおもむくところは、陳腐な規則の各側面にふれ、直戴にふるいものをうちくさくさつたものをひきずりおろし、まったくさえぎることはできない。

革命的大衆運動が毎回おこることに、何故いつも、企業の規則と制度に対する衝撃が出現しうるのか。このような現象は、たまたまおこつたものではないのか。あきらかに偶然ではない。毛主席はわれわれにつきのように教えている。「社会主義社会では、基本矛盾は依然として生産関係と生産力のあいだの矛盾、上部構造と経済的土台のあいだの矛盾である」。規則と制度は、その多数についていえば、生産関係と上部構造のカテゴリーに属する。社会主義企業の規則と制度と社会主義の経済的土台及び生産力の発展のあいだにも同じように照応をもし矛盾もする情況が存在する。革命的大衆運動の企業における不合理な規則と制度に対する衝撃は、まさ

にこのような矛盾の運動の反映である。

われわれの企業における規則と制度は天からふってきたものでなくて、ふるい経済を改造する過程において、二つの階級、二つの路線の激烈な闘争のなかで一步一步形成されたものである。総体からいえば、このような規則と制度は、社会主義生産関係を反映しており、社会主義生産の発展を促進することができる。ただし、そのなかでも、ある若干の古い伝統と痕跡が存在しており、生産の発展に対して阻害作用をおこす。企業が、正しい路線の下に、大衆に依拠して、規則と制度の不合理な部分をたえず克服し、合理的な部分を発展させ、古いものを取除き新しいものを配置し、それを生産の発展の必要に適合せしめることは、社会主義生産関係をうちかため、発展させるのに有利であり、広範な大衆の社会主義的積極性を發揮するのに有利である。これに反して、誤まった路線の攪乱の下で、規則と制度のなかの消極的部分が發展して社会主義生産関係を破壊するようになり、大衆の社会主義的積極性をひどく束縛する。このような情況の下で、企業の規則と制度は、変質することが可能となり、社会主義の経済的土台とまったく照応せず、結果として、大衆によって唾棄

されざるをえない。

プロレタリア文化大革命において、何故、大衆は古い管理制度に衝撃をあたえなければならぬのか。その根本原因は、若干の企業が劉少奇、林彪の修正主義路線の影響の下に、管理制度に社会主義の理に合わない現象が存在しており、労働者大衆の主人としての地位を十分体現していないからである。大衆が衝撃をあたえる主要目標は、大衆の社会主義的積極性を非常にきつく束縛しているいくらかの不合理な制度である。これらの制度は企業のなかの技術要員、幹部要員と労働者を尖锐に対立せしめ、労働者内部の団結に大きな損害をあたえ、労働者の隊列にきわめて大きな腐蝕作用をおこすので、うちやぶらざるをえない。このような修正主義制度はうちやぶらなければ、企業における人と人とのあいだに、社会主義の原則による正しい相互関係をうちたてることはできないし、労働者大衆の管理の主人としての自覚性と積極性を發揮することはできない。もともと、生産発展の必要に照応している規則と制度が、それがつぶされる所以は、やはり理由のないことではない。これは、あるいは、それが物質的刺戟と直結していたり、あるいは、制定した時に大衆路線をあゆまず、真

の大衆的基礎を欠落させていたことによる。真に、大衆の意見によりうちたてられた合理的な制度は、つぶそうとしてもつぶれるものではない。たとえ一時的につぶされたとしても、大衆がやはり自覚的に復活させることができる。革命的観点によつて、これらの現象を分析するなら、大衆がふるい制度に衝撃をあたえるのは、まさに、修正主義が企業を経営する路線に反対する表現であり、これは、社会主義生産を發展させるのに必要なことである、とみてとることができる。

「破らなければ立たず、塞ぎとめなければ流れず、止めなければ進まない」⁽¹⁾。規則と制度は古いものをうちやぶり除去することによつてのみ、同時に、新しいものをうちたてることがができる。プロレタリア文化大革命の闘争、批判、改革の過程において、われわれは、「専門家が工場を支配する」、「物質的刺激」、「統制し、口をふさぎ、圧迫する」一連の修正主義の企業経営路線を批判し、「鞍鋼憲法」の精神を大衆的に発揚することができた。社会主義企業のいくらかの根本的の制度は、たとえば、党の一元指導、民主集中制、幹部の労働への参加、幹部、労働者、技術要員の三結合等々は、プロレタリア文化大革命の前よりも、いずれも大きく發展した。マ

ルクス、レーニンと毛主席の著作を学習する大衆的な制度の確立は、企業のなかの政治的気分を濃厚にした。これはすべて、プロレタリア文化大革命の大いに破り、大いに立てるを経て、われわれの企業管理が以前に比べて、大いに強化された、ことを説明している。このことは、生産の大發展のために、いっそう有利な条件を創造した。

規則と制度がいったん確立すると、一定の厳肅性と相対的な安定性をもたなければならぬし、軽々に否定をすべきではない。生産の客観的法則を反映するそれらの制度が、客観的法則に意のままに反するならば、生産にきびしい損害をもたらしうるのである。しかし、人々の生産闘争、階級闘争そして科学実験は総じてたえず發展しているものであり、人々の客観的法則に対する認識も、総じて一步一步やはり向上している。いろいろの条件の制限を受けることにより、もともと制定した規則と制度は部分的あるいは全面的に実際にあわなくなったり、部分的あるいは全面的に大衆の必要にあわなくなったりするが、これは、通常かならず発生するものなのである。若干の規則は、一定の時間と一定の条件の下では、正しく、合理的であり、別の時間、別の条件の下では、変化し

て正しくなく、不合理になる。かつて、大衆の積極性を發揮するのに有利であり、生産力發展を推進することができるものも、やはり、転じて、大衆の積極性の發揮を妨害し、生産力の發展を妨害する可能性がある。このことから、企業の規則と制度に対しても、自覺的につねに調整を加え、革命と生産の發展に照応しなければならぬ。もし、合理的な規則と制度がいったんうちたてられれば、再び変化しうることはなれぬと思ふなら、それは、規則と制度の改革にきつと停滯をもたらし、これは非常に有害である。工場には、常に、所謂「合理的なもの」は非合法であり、合法的なものとは不合理である」といふ現象が存在する。あきらかに大衆の革新的創造は、多く、はやく、りっぱに、むだなく生産を發展させるのに有利であるが、往往にして、もとの規則の規定にあわないために「非合法」的な事柄としてみなされ、そして、古い規則により仕事をすれば、あきらかに、すくなく、おそく、おとつた、むだのある、ことになるのだが、それは、かえつて、「合法的」なものとして蔽として存在している。このような不思議な現象こそが、往往に規則と制度の改革に停滯をもたらす情況を生みだすことになる。

規則と制度をうちやぶりそしてうちたてる過程は、一つの闘争の過程である。古い思想と意識は、古い規則を維持し、古い規則はきつとまた古い思想の合法的な根拠となりうる。制度上、古いものをやぶり新しいものをうちたてるには、思想上の古いものをやぶり新しいものをうちたてなければならぬ。修正主義路線の影響の下に、いろいろの非プロレタリア思想、たとえば、官僚主義、大衆からはなれ、労働から離れ、實際から離れる古い社会の習慣、大衆の創造を輕視し、外國を迷信する洋奴哲学等は、つねに管理問題の上に頭をもたげてくる。たとえば、プロレタリア文化大革命のなかで批判されたことがあるものであつたとしても、外面を改革することによって再度出現する可能性がある。若干の人々は、責任を負わず、責任を負うことをおそれ、いつも、規則と制度によって仕事をし、検証することのできる証明書があり、調べることができる文章がある問題を提起しようと思ひ、このことから、いつも制度が多ければ多いほどいい、署名し捺印することが完全であればあるほどいいと、考える。このような誤つたものもろの思想が、もし、自由に發展するなら、規則と制度をうちやぶりうちたてることは、正しい軌道を歩む

ことがたいへんむつかしくなる。したがって、不合理な規則と制度を改革する全過程においては、イデオロギー領域の闘争に注意し、思想と政治路線面の教育をりっぱにつかみ、修正主義をたえず批判し、ブルジョア階級の世界観を批判することが、もっとも重要なのである。とくに、林彪の「克己復礼」というこの反動的綱領をしっかりとつかみ、林彪修正主義路線の企業の規則と制度の側面をふくむ各方面の表現を批判し、その流している毒をきれいに清めなければならない。

規則と制度をうちやぶりそしてうちたてるとは、帰するところ結局、客観的法則によっていかに仕事をするのかという問題であり、かならず、「思いきって大衆を動員し、すべては経験を経る」の原則をあくまで実行しなければならぬ。⁽²⁾広範な大衆の実践が、規則と制度が合理的であるかないかを検証する唯一の基本である。規則と制度をやぶり、うちたてることに対して、大衆がもっとも発言権をもっている。二〇数年来の実践的経験は、大衆のなかから大衆のなかへ、大衆により、大いに大衆運動をおこない、大衆の気力、智慧そして創意を十分發揮させ、つねに大衆が矛盾をあばくように動員し、そして、大衆によって矛盾を解決することが、あらゆる活動

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

をりっぱにおこなう重要条件であり、同様に、規則と制度を改革する唯一の正しい道であることを、証明している。この道にそうことによって、われわれの企業の規則と制度をはじめてたえず完璧にすることができ、社会主義生産関係をうちかため、完璧にし、生産力を発展さす有力な武器になりうる。

上海重油機械工場 黄来紀

- (1) 《新民主主義論》。《毛沢東選集》第二卷第六五頁。「新民主主義論」『毛沢東選集』第二卷、五〇八ページ。
(2) 毛主席語録。転引自一九五九年第二期《红旗》雜誌、毛沢東語録。一九五九年《红旗》第十一号から再引用。

六 規律は大衆の自覚の上のうちたてなければならぬ

「規律を強化すれば、革命はかならず勝利する」⁽¹⁾。規律は、路線を執行する保証であり、革命が勝利する必要条件である。社会主義企業においては、生産を効率的にすすめるために、やはりかならず革命の規律をもたなければならない。だが、われわれの規律は、いかなる性質の規律であり、このような規律は何に依拠して維持するのか。これがまず明確にされなければならない問題である。

一五三 (一五三)

マルクス主義は、ことなつた社会制度の下では、規律の性質と規律を維持する道はまったくことなつてゐることをわれわれに教えている。レーニンは、かつてつぎのように指摘した。「農奴制的な社会的労働組織は、鞭の規律にささえられていた……資本主義的な社会的労働組織は、飢への規律にささえられていた……共産主義的な社会的労働組織——社会主義はその第一歩である——は、地主のくびきをも資本家のくびきをも投げすてた勤労者自身の、自由で自覚した規律にささえられており……」(2)。三つの社会には、三つの規律があり、規律の階級性を深刻に反映し、ことなつた社会制度の下での人と人とのあいだのことなつた相互関係を深刻に反映している。農奴制社会と資本主義社会では、地主・資本家が制定した規律はいずれも労働人民を搾取し、圧迫するためであり、労働人民の反抗を圧迫するためである。したがって、彼等が規律を維持する方法は、強迫的、専制的にならざるをえない。このような反動的規律は、かならず、労働者、農民という労働大衆の反抗をはげしくひきおこすにちがいない。社会主義社会は生産手段の社会主義公有制をうちたてたので、社会主義企業の規律の性質も同様に根本的に変化した。

それは、少数の搾取者についていえば、彼等に社会主義改造を受けいれさせる武器であり、広範な労働者・農民という労働大衆についていえば、人民内部の矛盾を正しく処理し、社会主義的積極性を動員させ、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義生産を發展させ、あらゆる階級と階級差別を消滅するための条件をつくる重要手段にはかならない。社会主義の工場と企業において、労働者大衆は、工場の主人であり、労働は光栄ある事業になり、国家が工場にあたえた任務を多く、はやく、りっぱに、むだなく完成することは、広範な労働者大衆の切実な要求となつたので、彼等は、自覚的に革命の規律を遵守することができるのである、これは、社会主義制度の優越性の表現である。社会主義企業管理の任務は、革命と生産の發展を促すために、社会を管理する主人としての広範な労働者大衆の責任感と社会主義的積極性に依拠し、そして動員することにより、社会主義制度の優越性を十分發揮しなければならぬことである。このことから規則と制度は、各生産者に対して、一定の拘束力をもつけれど、だが、このような拘束力は、大衆の自覚の土台の上にうちたてられてのみその作用を真に發揮することができる、ただ行政命令によつて

のみ、規則と制度をつらぬくことは、往々にして、だめで通用しない。林彪の提出した「理解したものは実行しなければならず、理解しないものもやはり実行しなければならない」、

これは、完全に、孔老二の「民可使由之、不可使知之」の翻刻である。プロレタリア文化大革命前、若干の単位は、劉少奇、林彪修正主義路線の影響の下に、労働者の自覚を信頼せず、「指導者が法律をつくり、管理要員が法律を執行し、大衆が法律を守る」とかいて、労働者に対して、「統制を加え、口をふさぎ、圧迫する」を履行した。このような状況の下で、制定した規則と制度は、社会主義生産関係と社会主義制度の優越性を正しく反映することはできず、反対に、生産の発展を束縛するのである。品質の検査制、操作規則等々のようないくつかの規則と制度は、たとえ、その具体的内容が、比較的、生産の実際の必要に合致しているとしても、しかし、大衆の基盤が欠如しているため、やはり大衆の自覚的要求になることができない。文化大革命以後、毛主席の革命路線の指導の下に、多くの単位は大衆が革命的大批判を展開するように動員し、二つの企業経営路線の境界を区別し、生産的実践の経験を総括し、不合理な規則と制度を改革し、合理

的な規則と制度をうちたて、大衆が革命の規律を遵守することに對する認識も大いに高まった。

社会主義社会において、「人民は広範な民主と自由を享受するが、同時にまた社会主義の規律によつて自分自身を拘束しなければならない」⁽³⁾。広範な大衆は、社会主義の規律はあらゆる搾取階級の規律と根本的に異なることを、理解することができ、それ故、自覚して社会主義の規律を遵守し、合理的な規則と制度を遵守することは、革命をつかみ、生産を促す上で必要なことであるとみなす。そしてこれによつて、社会主義的積極性と創造性を動員することを一歩前進させ、生産の急速な発展を推進したのである。毛主席は、つぎのように指摘している。「すべて大衆の参加を必要とする活動は、もし大衆の自覚と自発的意志がなければ、いたずらに形式に流れて失敗するのである」⁽⁴⁾。社会主義の規律と規則と制度を真に大衆のなかに根づかせ、大衆の自覚的行動にかえさせれば、毛主席の革命路線を執行するための信頼しうる保証になる。もちろん、大衆の社会主義の自覚の程度は決して齊一していない。ブルジョア階級の思想の侵蝕により、少数の労働者の階級的自覚はまだ十分には高くなく、やはり、自由を要求す

るだけで規律を不要とする現象がきつとあらわれる。これに對して、われわれは、どのように正しく対処すべきなのか。

プロレタリア階級の社会主義的自覚は、従来、自然に發生するのではなくて、われわれの党の指導に依拠しており、マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想の教育に依拠している。企業のなかに自覚性の高くない少数の労働者が存在することは、つぎのことをまさに説明している。党の思想政治活動を強化し、深く入ってきこまかく社会主義教育をすすめ、彼等の階級的自覚を啓発し、彼等が自由と規律のあいだの弁証法的關係を正しく認識するのを助け、プロレタリア階級の革命事業にとつて社会主義の規律を執行することの重要な意義を正しく認識するのを助け、彼等が自覚して社会主義の規律によつて自己を拘束させるようにしなければならぬ。

「我々の規律は、この自覚性の上にきづかれる。これは我々の党の指導と教育の結果である⁽⁵⁾。もちろん、一時、向きを変えることのない人間がやはり存在しうるが、だが、われわれは、二種類のことになった性質の矛盾を処理し、「團結―批判―團結」の公式を運用して人民内部の矛盾を処理することをかたく守りさえすれば、広範な大衆の社会主義的積極性を

動員することができ、集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、統一的な意志もあれば、個々人の気持ものびのびとし、いきいきと活潑である、というそのような政治局面をつくりだすことができる。もし、われわれは大衆の多数をみることができず、少数の人間のもっている若干の欠点のみでなく、本質的に大衆の社会主義的積極性を発見するのではなく、規律のだらけた現象をみて、思想政治工作を強化することに重点をおかずに、單純に規則と制度により問題を解決しようとするだけで、はなはだしきは、不合理な規則と制度をあくまで貫徹することに魅惑されるならば、それは、われわれが要求するところの気持がのびのびし、いきいきとした活潑なそのような政治局面を決して生みだすことはできない。ごく少数の規律違反の情況が重大で、何回教えても改めることのできない者にいたっては、厳肅に批判をすすめると同時に、規律を執行することはもちろんやはり必要なことである。そして、このことも、やはり、多数の人々の自覚の基礎の上にうちたてることによつてのみ、はじめて強固にすることができぬ。

中国共産党第十回全国代表大会政治報告はつぎのように指

摘している。「大衆に依拠することは、二十数年らしい社会主義建設におけるわれわつの基本的経験のひとつである」。

われわれが規則と制度をうちたててそしてつらぬくためには、かならず、この点から出発することによってのみ予期した効果をおさめることができる。ましてや、多くの問題は規則と制度により決して解決できるものであるというものではない。偉大な社会主義建設において、広範な大衆は昼夜を分かたず報酬をあてせず、天をつく意気ごみで、重い任務にあらそつてのぞみ、主動的に協力するそのような革命的風格は、たんに、規則と制度により求めることができるのではなくて、党の指導により、マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想により武装した広範な大衆の結果である。「政治工作はすべての経済工作の生命線である」。党の思想政治工作が強化されたときはいつとも、大衆の社会主義的積極性が十分動員されて、われわれの企業はいきいきとし、われわれの事業も活気にみち、党の思想政治工作が弱まったときはいつとも、大衆の社会主義的積極性は抑圧を受け、われわれの企業管理作業も、社会主義の方向から離脱し、われわれの事業は、挫折をこうむるであろう。この歴史的経験を、われわれはいついかなる

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

ときも忘れることはできない。

滬江機械工場 呉月華

(1) 毛主席語録。転引自一九六七年第三期《红旗》雜誌。毛沢東語録。一九六七年《红旗》第三号から再引用。

(2) 《偉大的創舉》。《列寧全集》第二十九卷第三八一頁。「偉大な創意」《レーニン全集》②大月書店、四二二—二四二ページ。

(3) 《関于正確處理人民内部矛盾的問題》。《毛沢東著作選読》（甲種本）人民出版社一九六六年版第三三三頁。「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」《毛沢東著作選》六一七—七二七ページ。

(4) 《文化工作中的統一戰線》。《毛沢東選集》第三卷第九一—九三頁。「文化活動における統一戰線」《毛沢東選集》第三卷、二六七—二七二ページ。

(5) 毛主席語録。転引自一九七二年八月一日《人民日報》、《红旗》雜誌、《解放軍報》社論。

七 大字報は大衆が管理に参加する武器である

社会主義の工場と企業において、労働者大衆は企業管理上の問題に対して、常に大字報の形式をもちいて指導者に対して意見を提出し、措置を提出する。君の一枚、私の一枚、人間が多ければ議論が多くなり、熱気も高くなり、意気ごみも大きくなる。大字報を動力にして、指導者が重視し、大衆が

支持して、数多くの長期的に解決することができなかった問題がかなりはやく解決することができた。プロレタリア文化大革命と批林整風運動を通じて、とくに、目下の批林批孔闘争において、ますます多くの工場と企業の指導幹部は、大字報に対する認識を、一歩進めて深め、自覚的に大字報を、路線を語り、矛盾をあばき、差異をさがし、転化をうながし、労働者大衆により企業管理を強化する有力な武器としている。毛主席はつぎのようにわれわれに教えている。「大字報はひじょうに効果のある新式の武器で、都市、農村、工場、協同組合、商店、機関、学校、部隊、町内など、およそ大衆のいるところならすべて活用することができる。すでに広く活用されているが、いつまでも活用していくべきである」⁽¹⁾。大衆が企業管理に参加するよう動員することについていえば、大字報は、「ひじょうに効果のある新式の武器であり」、たいへん大きな作用をおこしている。

革命的な大字報は、大衆が管理に参加する社会主義的積極性を広範囲に動員することができる。プロレタリア文化大革命以来、工場と企業において大衆が管理に参加する内容と形式はいずれも大きく発展した。とくに、工場と企業における各

級の革命委員会は、労働者大衆の代表が参加したものであり、これは、広範な大衆の積極性と創造性を動員し、労働者大衆が企業の主人としての革命精神を発揚し、企業内部の生産における人々の相互関係の改善を一歩前進させ、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義の生産を發展させる上で、顕著なる役割をもっている。しかし工場と企業の各級の指導工作のなかに直接参加する労働者大衆は、その人数についていえば、総じて限度がある。所謂、大衆が管理に参加し、労働者大衆が企業の指導権を把握することは、決して一人一人が皆一つの指導的職務を担当しなければならないということの意味せず、キイポイントは、どのように民主を発揚し、一人一人の労働者に全体の企業の管理に対していつも発言権をもたせるかということである。大字報は広範な大衆の喜び樂しみを見聞するために、民主を十分に発揚するすぐれた形式である。大字報は形式、大小にかかわらず、書いて随時にはいることができる。労働者大衆は、管理上の問題に対して、何らかの意見、提案があれば、いつも、大字報を通じて直接提起することができる。これは、一人一人の労働者が直接管理に参加することを可能にすることを提供した。大字報というこの

武器を十分運用すれば、必然的に、大衆が企業管理に参加し、労働者大衆が企業の指導権を掌握することにより、さらに広範な大衆の基盤をつくりだすことができる。

われわれは、プロレタリア階級独裁の社会主義国家である。労働者階級は国家の主人であり、彼等は、われわれの党と国家の各級の幹部に対して革命的監督をおこなう権利をもっている。革命的大字報は、また労働者大衆の革命的監督の役割を十分發揮する有力な武器である。社会主義企業管理は自然に形成されるものでなくて、二つの階級、二つの道、二つの路線の反復する闘争のなかで發展するのである。ブルジョア階級とその代理人は、資本主義復活のため、いつも、企業管理を修正主義の邪道にひきこもうとする。そして、若干のわれわれの同志は、頭のなかにはマルクス主義が多くなく、また大衆に依拠しないことにより、マルクス主義と修正主義、社会主義と資本主義のあいだの区別をしばしば明確に区別せず、しばしば形而上学的観点によって工作における矛盾と問題を認識し、処理している。たとえば、ものすごい大衆運動が古い規則と制度を攻撃するとき、ある人はかえってそこで、「のこりかすをいだけ欠点を守り」、そして広範な大衆が新

しい規則と制度を健全にするのに一歩前進すると、彼はまたそこで「昔の規則にしたがい行う」、を鼓吹しプロレタリア階級の革命路線の指導の下に制定した規則と制度を修正主義路線の擾乱の下に制定された規則と制度と混同して論じる。

国家が工場と企業にさらに多くの数量の生産物を生産するよう要求するとき、ある人は、産出額、産出高だけを語り、生産物の質を軽視し、そして、国家が生産物の質を向上させることを要求するとき、また数量と生産原価に対する要求を放棄して、本来、密接に関連している二つの側面を分裂させる。これらの思想傾向は、あるときは、いく人かの人間の中に、一つの習慣を形成し、毛主席の革命路線の貫徹執行に影響をあたえ、革命と生産に損失をあたえる。これは、現実の階級闘争であり、二つの路線の闘争の反映である。企業管理上の二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争に対して、二種類の性質のことになった矛盾の性質を厳格に区別しなければならぬ上、なお各種の誤まった思想に対して批判と闘争を展開しなければならぬ。大字報こそは、各種のあやまった思想に対して闘争を展開する有力な武器にはかならない。大字報は、矛盾を大衆の前に公開し、皆に議論させ、皆に識別

させ、皆に批判させ、しばしばいく枚もの大字報をはり、一枚が十枚になり、十枚が百枚になり、非常にはやく、一つの強大な革命的批判勢力を形成し、各種のあやまった思想に対して猛烈な攻撃を加える。大字報の前に、修正主義のしるものは脚をふみとどめることはできず、あやまった観点をもつ同志の頭脳ははつきりめざめ、ながいあいだ解決しなかつた問題も解決するようになるのである。このように、プロレタリア階級の革命の大きな流れは、ブルジョア階級の反動逆流を非常にはやく撃退し、われわれの事業が社会主義の方向にそってたえず前進するのをおしすすめた。

ある若干の同志は、企業管理の上で大字報を運用することに対して、いつもあまりなれず、つねに、大字報をはる人間がいないことをその単位の情勢が非常にいい指標であると思ふ。彼等は幾枚かの大字報がはりだされているのを見るやいなや、恐れて不安に思い、情勢がよくないと考え、大字報は、企業管理の「正常な秩序」を攪乱するものであると心配する。その実は、実際情況は常に彼等の考え方と相反している。労働者大衆は革命的な大字報をはりだし、若干の単位の静かで淋しく、ひっそりした状況を改革し、これによって、そ

こにいっきとした活潑な政治局面をうみだした。

「管理もまた社会主義教育である」。社会主義企業管理をおこなうことは、實際上、イデオロギーの領域を含む上部構造の革命である。プロレタリア階級は、社会主義革命と社会主義建設事業の前進のため、大字報というこの武器を活用し、各種のあやまった思想に対して闘争をすすめることは、まったくやらなければならないことであり、必要なことである。あやまりがあれば、暴露し、批判しなければならぬ。当然、このような批判は、「できるかぎり弁証法的方法をとるよう(2)にすべきであり」、「科学的な分析が必要であり、十分な説得力が必要である」。大衆が大字報をはることを情勢がよくないとする見方は、はなはだしきにいたっては、大字報を、企業管理の外に排斥する見方は、根拠のないことである。大衆が大字報を書き、管理活動のなかの問題を暴露するが、その目的は、真理を堅持し、あやまりをただすためである。このような大字報がより多いということは、広範な大衆の管理に対する関心をまさに説明しており、大衆が企業の主人であるという自覚の向上を説明している。これは、情勢が大いによい指標であり、まったく喜ぶべき現象である。矛盾は暴露する

ことよってのみ解決することができる。大衆の大字報をこわがることは、積極的に大衆が矛盾を暴露するように導かず、矛盾をそこにおおいかくし、解決することができず、このよるな所謂「正常な秩序」は、まさに正常でないのである。それは、大衆を動員するのに不利であり、プロレタリア階級がブルジョア階級に対して闘争を展開するのに不利である。世界の事物は運動しており、管理活動は、何か静止し不変の「秩序」でありえない。管理活動を固定化さすことは、停滞、前進しないことである。われわれが大衆を動員し、たえず矛盾を暴露し、矛盾を解決することは、企業管理上で、いきいきとした活潑な政治局面をつくりだそうとすることにほかならない。闘争における事物の發展法則こそ、たえずわれわれの活動を推進することができ、そして、主要な傾向に注意を向けるようにすると同時に、また、おおいかくされた別の傾向にできるだけ注意を向けることを可能にする。

社会主義企業管理をりっぱにおこなうにあたって、大字報の作用を十分發揮する上で、そのキイポイントは指導者にある。われわれは、かならずプロレタリア階級の立場にしっかりと立脚し、党の基本路線によって指導し、革命的な大衆運動

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

を情熱的に支持し、大字報というこの有力な武器を使用することを大いにつとめて鼓舞激励しなければならない。とくに批林批孔闘争において、大字報を用いて林彪が鼓吹した「克己復礼」をしっかりとつかみ、現実の階級闘争、二つの路線闘争の是非問題と連系させ深く批判をすすめることは、社会主義生産関係及びその上部構造を毛主席のさししめす方向にそってたえず完璧にし、社会主義経済の土台を強化することをうながし、生産力の巨大な發展を促進させるのである。

曹宝妹

(1) へ紹介一個合作社。へ毛沢東著作選(甲種本) 人民出版社一九六六年版第三八一頁。「ある協同組合を紹介する」毛沢東著作選」七〇四ページ。

(2) へ関于正確處理人民内部矛盾の問題(甲種本) 一九六六年版第三五四頁。「人民内部の矛盾を正しく處理する問題について」毛沢東著作選」六五五ページ。

八 経済採算の社会主義原則を堅持する

毛主席はつぎのようにわれわれに教えている。「いかなる社会主義の経済事業も、可能なかぎり十分人力と設備を利用して、できるだけ労働組織を改善し、经济管理を改善し、そし

て労働生産性を向上させ、あらゆる節約できる人力と物力を節約し、経済競争と経済採算を実行するよう注意しなければならない^(I)。経済採算は社会主義企業管理の一つの重要な内容である。経済採算をりっぱにおこなうことは、社会主義企業が党の社会主義建設総路線、そして節約、勤儉を励行して企業を経営する方針をあくまで実行する上で、たいへん重要な意義をもつ。

経済採算とは、すなわち、通用の話していうならば、記帳、貸借複記の方法によって、生産過程における労働の消耗と労働の成果を記録、計算、分析して対比することである。生産物の生産量、品種、質、物財の消耗等々を計算するのを、実物計算と呼ぶ。生産物の生産額、原価、利潤、資金の運動等々を計算するのは、価値計算と呼ばれる。経済採算をうまくおこない、できるだけすくない人力、物力そして財力でもって、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義生産を發展させることは、社会主義の生産関係、即ちプロレタリア階級の経済的土台をたえず強化し、完璧にすることに有利である。社会主義企業の経済採算をりっぱにおこなうためには、計画、技術、労働、物資そして財務等々の各項の管理制

度をうちたて、健全にし、定額管理、原記録、統計、計量等々の各項の活動をりっぱにおこなう必要がある。このことから、経済採算は、ややこまかいそして複雑な活動となり、それは、非常に多くの具体的業務を含み、非常に多くの計算をしなければならぬ。しかし、経済採算は決して単純な技術的性質の加減乗除ではない。どのような計算の方法で毎回帳簿をつけるのか、何が合理的であり、何が非合理であるかは、いずれも社会主義の原則に一致するかしないかの問題である。

何が経済採算の社会主義原則なのか。それは、社会主義企業の経済採算は、社会主義生産の目的に服従しなければならぬ、ということである。社会主義生産の目的は、社会主義国家と広範な労働人民のたえず増大する需要を満足させるためであり、社会主義の経済的土台を強化し、發展させ、プロレタリア階級独裁をうちかため、共産主義を実現する条件を創造するためである。社会主義生産の目的に一致することは、やはり社会主義原則に一致することである。しかし、この点をおこなおうとすれば、一つの闘争過程をもつ。

社会主義企業においては、ある種類の生産物の生産において、どれだけの鋼材、どれだけの電力、どれだけのその他の

材料、等々を費消しなければならないかは、実物計算を通して、物財の消耗は、節約であるのかそれとも浪費であるのかをみてとることができ、こうすることによって、節約を励行し、浪費に反対する必要な措置をとることができる。だが、社会主義社会においては、このような実物計算はいずれも価値計算の形式を通して表現されなければならない。たとえば、どれだけの生産額を形成し、どれだけの原価を費消し、どれだけの利潤を取得するのか、等々である。価値形式を利用して経済採算をおこなうことは、社会主義社会において依然として必要なことである。しかし、価値は、商品経済の条件下で形成された経済範疇である。社会主義社会において、価値範疇が反映しているのは、社会主義生産関係であるけれど、しかし、それは、畢竟、商品経済の範疇であり、旧社会の母班と痕跡をおびている。価値範疇の存在は、商品生産の存在を表現しており、そして、商品生産の存在こそは、商品における使用価値と価値の矛盾の存在を表現している。このように、一定の条件の下で、ブルジョア階級および党内におけるその代理人は、このような矛盾を利用して社会主義建設を破壊し、社会主義経済を資本主義のよこしまな道にひきこむこ

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

とが可能である。たとえば、ある企業は、資本主義経営思想と劉少奇、林彪のあの「大利あれば大いに仕事をし、小利なれば仕事をすこししかせず、利がなければ仕事をしない」、「招財進宝」の修正主義路線の影響を受けており、国家と人民の需要によらずに、生産額の高い、利潤の多い生産物を多く生産し、生産額の小さい、利潤の小さい生産物をすくなく生産し、はなはだしきにいたっては、盲目的に、生産額を追求し、利潤を追求する傾向があらわれる。このような一面的に価値を追求し、使用価値を無視するあやまったやり方は、社会主義生産の目的に背を向け反対の方向にいつている。

一個別企業の経済採算が資本主義経営思想の影響を受けたとしても、一時的に、生産額は高く、原価は低く、利潤が多く、資金回転がはやくて、この企業の経済採算のやり方はやはりあやまっていないかのように表現されることはありうる。しかし、それは、かえって、社会主義生産の目的から背離して、国家と人民の必要な生産物は、適宜必要なときに満足することができず、国家と人民が必要でない生産物がかえって大量に生産されて、価値と使用価値がいずれも実現することのできない情況を生みだす。このことは、必然的に国民経済

計画を破壊し、社会的生産力の浪費を形成するであろう。こ
こから、経済採算は、決してたんなる一つの記帳、貸借複記
の問題ではないのであって、それは、社会主義と資本主義の
二種類の思想、二つの道の深刻な闘争を反映している。経済
採算の社会主義原則を堅持するには、経済計算過程において
あらわれるこのような矛盾と闘争を正しく認識し、処理しな
ければならず、そして、このことをおこなうためには、かな
らず、党の基本路線をカナメとし、一つ一つの具体的数字を
通じて、路線上の是非をはっきり明確に区別し、修正主義路
線とブルジョア階級の思想的影響とあくまで闘争し、自覚的
に党と国家の方針、政策そして統一的な計画により仕事を
おこなひ、全面的に国家の規定する各項の計画指標を完成しな
ければならない。このようにして、はじめて、社会主義生産
の目的に一致することができる。

社会主義社会においては、社会主義企業のあいだの経済関
係は、やはり、社会主義生産の目的に従属しなければならな
い。生産手段の社会主義公有制の性質は、企業のあいだに広
範囲な協業をおこなう可能性を提供した。同一の目標の下に、
企業のあいだに相互支援と相互援助をしなければならぬ。

同時に、社会主義企業は、また、いずれも、一つ一つ相対的
に独立した採算単位であるが、企業間の経済連系もいずれも、
かならず計算をおこなわなければならない。企業のあいだの
このような経済採算関係は、一方では、個々の企業の経営の
責任感を強化するのに役立つ、堅持しなければならないこと
である。他方では、一定の条件の下で、企業のあいだの経済
的利益上の矛盾により、企業のあいだの共同的協業に影響を
およぼすこともありうる。たとえば、若干の工場が生産する
部分品と機械設備が、もし、改革と改善を適切にすすめるな
ら、これらの部分品や機械設備を使用する工場についていう
なら、労働生産性を顕著に高めることができる。だが、部分
品と機械設備を生産する工場自体についていえば、製品の改
革と改善の過程において、一時、原価をすこし高めるか労働
生産性をすこし低めるかをできるだけおこなわなければならない。
この矛盾をどのように正しく処理すべきか。

社会主義企業はいずれも統一した社会主義経済の構成部分
であり、社会主義企業のあいだの根本的利益は、一致してお
り、根本的な利害の衝突はなく、まったく、資本主義企業の
あいだのあの相互競争、人に損をさせ己を利する関係とは異

なる。このような特徴により、社会主義経済は、一企業範囲内の経済採算をもつばかりでなく、社会全体の範囲における経済採算をもつ。一企業は局部であり、社会全体は全局である。個別企業の経済採算は、全社会の経済採算に従属しなければならず、またこうもいえる。各個別企業は、まず、国民

経済の全利益から出発して、局部を全体の利益に従属させなければならぬ。社会全体の生産に立ちさえすれば、たとえ、一企業が一時「採算にあわぬ」としても、やはり、積極的に仕事をし、関係ある部門は積極的に支持しなければならぬ。当然、各企業は、いずれも独立採算をすすめなければならぬ。各企業相互のあいだにやはり記帳、貸借複記をおこない、各自損益を計算しなければならないが、しかし、第一義的なことは、共同的な協業することであり、共産主義の風格を發揚することである。共同的な協業をすて、共産主義の風格をすて、個別企業の局部的利益を社会全体の全局的利益の上におくならば、それが發展すると、社会主義企業を脱皮変質せしめることを可能にする。これは、社会主義企業相互関係の問題における二つの階級、二つの道、二つの路線の激烈な闘争である。共産主義の風格を發揚し、社会

主義原則により、企業間の相互関係を正しく処理し、たえず發展させ、完璧にしさえすれば、社会主義制度の優越性を十分發揮させ、社会主義生産が、多く、はやく、りっぱに、むだなく發展するようにおしすすめ、企業の社会主義的方向を堅持することができる。

社会主義企業の経済採算は、社会主義生産関係を反映しており、必然的に、広範な大衆の支持と擁護を得ることができ。広範な大衆は、生産の第一線においてたたかっており、どのように、人力、物力、財力を節約し、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義生産を發展させることができるかに對して、もつとも發言権をもっている。数多くの工場と企業は、小組計算をうちたてているが、これは、やはり、大衆採算の一つの形式である。企業の財務要員は、大衆に依拠し、大衆と結合することによってのみ、企業経営管理のなかの各種の問題を發見し、そして、自己の特色を發揮し、大衆と一緒に企業の経済採算をおこなえばおこなうほどよくなるようにすることができ。

單 希

(一) 六真如区李子園農業生産合作社節約生産費用の経験一文

按語」へ中国農村の社会主義高潮」中冊第七六八頁。「眞如区李子園農業生産協同組合が生産費を節約した経験」という文章に対する評語「中国農村における社会主義の高まり」中七六八ページ。

九 大衆と結合した管理機構をうちたてる

工場と企業において、革命化した大衆と結合した管理機構をうちたてることは、企業管理を強化する一つの重要な内容である。それは、党の一元化した指導を保障し、広範な大衆の社会主義的積極性を有効に組織し、動員し、社会主義生産を發展させる上で、いずれも重要な役割をもっている。

新中国成立以来、工場と企業 of 管理機構の設置問題について、二つの路線、二つの思想の闘争が存在しており、数多くの正反両側面の経験がある。工場と企業 of 管理機構をりっぱに運用するためには、かならず、路線闘争をカナメとし、経験を真面目に総括しなければならず、それによつてはじめて、実質をつかみ、法則的なものをさがしだすことができる。

多数の工場についていうなら、解放の初期から第一次五年計画の開始まで、民主的改革を経て、職工長制、班長制、身体検査制等々の労働者をもつぱら圧迫する資本主義管理制

度と管理機構を廃止すると、労働者大衆が立ちあがり主人となる革命的精神が大大的に激発した。一九五三年以後、数多くのところで、外国のやり方の通りにして、修正主義の「企業長制」をおしすすめ、老大な管理機構をうちたて、労働者の社会主義的積極性を非常に大きく束縛した。一九五八年、労働者大衆はたちあがってこれらのしるものに衝撃をあたえ、爆発的な大躍進の局面をまきおこした。一九六一年、一九六二年、劉少奇修正主義路線の影響の下に、若干の企業 of 管理機構は分業が細分化しすぎ、何層にもかさねあわさった古い道が復活し、結果として、大衆から離れ、生産の發展を阻害した。プロレタリア文化大革命において、広範な大衆はまた、たちあがり、毛主席の革命路線のみちびぎの下に、大衆の積極性を圧迫し、束縛している規則と制度に襲撃を加え、大衆から離れた幾重にもかさなりあつた機構をうちやぶつた。数多くの工場と企業は革命委員会の指導の下に、機動力のある、統一的な生産指揮系統をうちたて、広範囲に「三結合」を実行し、幹部が集団的生産労働に参加することを堅持し、密接に大衆と結合し、いきいきとした革命の作風を發揚した。このような大衆と結合した管理機構は、思想の革命化と組織の

革命化を促進し、広範な大衆の積極性を動員し、これによって、社会主義生産の発展の上に、積極的な推進的作用をおこした。

解放以来、何回も反復して設置された管理機構の経験のなから、工場と企業 of 管理機構の設置は、一つの事務的な工作でなくて、一場の尖鋭な、深刻な路線闘争であることとみてとることが出来る。これらの豊富な歴史的経験は、われわれに對してたいへん深刻な教育である。

企業管理機構設置の問題では、まず、根本的な指導思想を樹立しなければならぬ。毛主席はわれわれにつきのようになにを教えている。「国家機関の改革で、もっとも根本的な一カ条は、大衆と結合することである」⁽¹⁾。毛主席のこのかがやける指示は、国家機関改革の根本的な指導思想であり、われわれの工場と企業 of 機構設置の根本的な指導思想でもある。

工場と企業 of 管理機構は、かならず大衆と結合するのに有利でなければならぬ、これはわれわれの社会主義企業 of 性質により決定されるのであり、社会主義企業が資本主義企業と修正主義企業とを区別する一つの重要な特徴である。資本主義企業 of 管理機構は、たいへんたくさんのタイプをあみだ

すことができるけれど、しかし、資本家は永遠に大衆と結合することが出来る管理機構をあみだすことを会得することができないし、本来的にあみだすことがまた不可能である。何故なら、資本主義企業と修正主義企業では、生産関係の性質は、資本家が労働者を搾取することであるから、このような生産関係の性質により決定され、このような生産関係を維持するために奉仕する管理機構は、資本家が労働者を支配するために用いる用具でありうるにすぎないからである。したがって、それは、労働者大衆と根本的に對立するものである。社会主義企業の方はそれと相反して、それは、生産手段の社会主義公有制の基礎の上にうちたてられており、広範な労働者大衆が工場と企業 of 主人であり、労働者大衆の自覚的な社会主義的積極性に依拠することは、社会主義企業をりっぱに経営し、社会主義生産を發展さすもともと根本的な径路である。林彪は、孔孟の「無君子莫治野人」の謬説を受けつぎ、「上智下愚」を宣揚することは、根本的に、労働者とその他の労働人民は社会主義企業 of 主人であることを否定することにほかならない。われわれの社会主義企業 of 管理機構は、林彪と孔孟の道に反してこれをおこない、大衆と密接に結合して、真に

大衆のなから、大衆のなかへ、を實行しなければならぬ。各個別企業は、具体的情況は一樣でないから、それらの組織機構は画的でありえない、が、いずれも、大衆と結合するのには有利でなければならぬ。この一カ条から離れて、形式上、各称上のことだけ、時間をつぶすなら、それは、本質をみすて、末梢的なことをおこない、方向を見失うことになる。工場と企業の管理機構は、どのようにしてはじめて大衆と結合することに有利になりうるができるのか。労働者大衆が管理に参加することに依拠することが、もつとも重要な一カ条である。

毛主席は、従来から、労働者大衆が企業管理に参加する問題を十分重視し、何回も、自ら、労働者大衆が企業管理に参加する経験を総括し、肯定した。「鞍鋼憲法」において、労働者大衆が管理に参加することを社会主義企業をりつぱに經營する根本原則としている。二十数年来、毛主席の革命路線のみちびぎの下に、数多くの工場と企業は各種の方法を創造し、労働者大衆が管理に参加することに依拠することにより、たいへん大きな成績を獲得した。とくに、プロレタリア文化大革命のなかにおいて誕生した「三結合」の革命委員会は、

大衆といっそう結合する特徴を體現した。実践は、党の一元化した指導の下に、労働者大衆が直接工場の指導と管理に参加し、彼等は、「役人にもなれば、一般大衆にもなる」⁽²⁾、生産の持場を離れずに、広範な大衆と直接的、密接な関係を保持していることを、証明している。このようにすれば、適宜、大衆の意見と要求を反映し、そして、各級の指導機関に対して下と上からの大衆の監督を實行できる上に、なお、党の任務、政策を迅速につらぬき、広範な大衆の自覚的行動にかえることができる。これは、社会主義企業における党の指導と各級の管理工作をしていっそう広範で、深く厚い大衆的基礎をもたせしめ、そして、企業の指導者や管理要員が大衆路線を堅持し、緊密に大衆と結合するための信頼することのできる保証を提供する。

つぎに、企業管理機構設置問題の上で、さらに大衆とりつぱに結合することができるためには、かならず精兵簡政を實行しなければならぬ。毛主席は何回もわれわれにつきのよう⁽³⁾に教えている。「機構を簡素化し、不合理な規則と制度を改革し、機関の課員を下放させ」⁽³⁾、「いく重にもかさなって⁽³⁾いる行政機構をうちやぶり、精兵簡政をおこない、大衆と結合

する革命化した指導グループを組織し⁽⁴⁾なければならない。所謂「人が多ければ仕事がしやすい」は、このような意味から理解しなければならぬ。数多くの仕事は、大衆といっしょになってのみりっぱにやることが出来る。管理要員が簡素化されても、しかし、大衆とさらに緊密さを加えるなら、仕事はきつとうまくはかどることが出来る。これに反して、管理要員がさらに多くなっても、広範な大衆と比較するといつても少数であるが、もし、大衆と結合せず、大衆に依拠しなければ、依然として仕事をうまくはこぶことはできない。

当然、機構を簡素化することは、分析を加えずに、機構を合併したり、人員を削減することができるといふことをやはりいうのではなくて、単純化と効率化は統一しなければならぬが、簡素化の目的は、大衆と結合すること、活動の効率を高めることである、といふことである。われわれの「兵」が精鋭化されて、皆いづれも積極的に工作責任を負い、しなければならぬ仕事をいづれも真面目におこなうなら、仕事があつても仕事をする人間がいまいという現象を生みだすことはありえない。生産の急速な発展、闘争、批判、改革の一步の深まりにより、若干の企業の機構設置は、新しい状況

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

に完全に適応しない局面を生みだしているので、適宜、十分調整を加えなければならない。これは、プロレタリア文化大革命における精兵簡政の勝利と成果を一步すすめてうちかため、そして、発展させるためである。大衆の古い管理機構を襲撃する革命的行動に対して、決して否定を加えることはない。また、分析を加えずに、そのような機構の過去のやり方を復活させることを採用することもできない。

工場と企業の管理機構を調整するためには、われわれは、共同して、「精鋭簡素、統一、能率向上、節約および官僚主義反対を……達成しなければならない」といふことを要求する。一般的にいって、集中と分散、分業と協業等のいくつかの側面の関係に注意し、りっぱに処理しなければならない。大衆に有利になるということから出発して、統一指導と分級管理とが結合した原則を實行しなければならない。集中についていふとすぐに何でも皆集中する必要はなく、分散についていふと何でもまた分散する必要はない。工場と企業の機能と機構は、明確な責任と分業をもたなければならぬが、分業は、分派とは同じでなく、各人がめいめい門前の雪をとりぬぐうことはできない。われわれは、社会主義企業であり、

同一目標の下に相互に支持しあい、相互に協業することを強調しなければならぬ。過度に制約を強調することは、管理のやり方としてよくなく、ルーズになる。制約から、制約へは、最後にやはり大衆を制約し、社会主義的積極性を束縛する。単に、制約の機能によるだけで、管理すれば、その実質は、やはり、大衆を「管理する」という思想で、そして大衆に依拠するのではないから、結果は、管理できずまたりつばに管理できない。合理的な組織と機構をもったとしても、すぐれた革命的作風と誠心誠意人民に奉仕する思想がなければ、やはり大衆と結合するという目的を達成することはできない。このことから、指導幹部と管理要員は、かならず、大衆に対して、生産に対して、深く実際に入り、調査研究をおこない、労働に参加することを堅持し、思想の革命化をりつばにおこなわなければならない。

最後に、工場と企業の管理機構の設置に対処するためには、なお、発展の観点をうちたてなければならない。いかなる管理機構もいずれも固定して不変のものでなく、それはいつも、革命と生産の情勢の発展にしがたって発展しなければならぬ。元来、革命と生産とに照応する管理機構は、一定の条件

の下で、また、部分的に、はなはだしきときには、全面的に、変化の仕方が、革命と生産に照応しないことがありうる。このときは、適宜、調整を加えなければならない。これは、一つの新陳代謝の弁証法的過程である。そして、組織と機構が調整を必要とするとき、同じように広範な大衆に依拠して、いっしょに相談解決しなければならず、少数の人間だけで門をとして決定することはいけぬ。大衆路線を歩まず、大衆と結合する管理機構をうちたてなければ、かならず大衆の反対を受けるであろう。処理の仕方がまずいと、数年すれば、大衆は、また、きつと大衆から離れたぶくぶくはれた管理機構を襲撃するようになる。広範な大衆は、三大革命闘争の第一線に身をおき、もっとも実際の状況を理解しており、彼等は、自分の工場がどれだけの機構を設置し、どれだけの人間を配置するべきかに対して、心中にもっともはっきりした計画をもっている。十分大衆を動員し、民主を発揚することによってのみ、機構の設置を比較的に実際に合致せしめることができ、一步一步、本当に、大衆と結合した企業管理機構をうちたてることができる。

(1) 転引自一九六六年三月三〇日《人民日報》。一九六八年三月三〇日《人民日報》より再引用。

(2) 毛主席語録。転引自一九六七年六月八日《人民日報》。毛沢東語録。一九六七年六月八日《人民日報》より再引用。

(3) 転引自一九六八年第二期《紅旗》雜誌。一九六八年第二号の『紅旗』より再引用。

(4) 転引自一九六八年三月三〇日《人民日報》。一九六八年三月三〇日の『人民日報』から再引用。

(5) 《抗日時期的經濟問題和財政問題》。《毛沢東選集第三卷第八五〇頁》。「抗日時期的經濟問題と財政問題」『毛沢東選集』第三卷一六六三ページ。

十 党の指導の下に革命委員会の作用を發揮する

党の第十回全国代表大会の文献は、各級の党委員会は、党の一元化した指導の強化を一步前進させなければならないと同時に、革命委員会の作用を十分發揮しなければならぬ、と指摘している。われわれは、学習のなかで、この指示を深く体得し、社会主義企業管理のなかで、この指示を真面目におこなうことは、社会主義企業管理をりっぱにおこない、プロレタリア階級独裁の経済的土台をうちかためる根本的保障である。

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

社会主義経済は公有制の経済である。国营企業において、それは、プロレタリア階級と労働人民により、共同で、生産手段を占有している。しかし、たとえ国营経済であろうと、集団経済であろうと、いずれも、プロレタリア階級の前衛・共産党の統一的な指導の下に、プロレタリア階級と広範な労働人民の利益により、生産と経営活動をすすめている。党の統一した指導から離れるかあるいは党の統一した指導が弱められると、社会主義企業はきつとまちがった道を歩くことになる。毛主席はのべている。「工業、農業、文化、教育、軍隊、政府、党という七つの分野で、党がすべてを指導する」⁽¹⁾。社会主義経済の各側面は、いずれも、かならず党の一元化した指導を強めなければならない。

さて、社会主義企業においては、どのようにすれば、党の一元化した指導を強めるものとみなされるか。この側面については、われわれは真面目に総括することができるに値する豊富な経験と教訓をもっている。プロレタリア文化大革命以前、若干の企業における同志は、党の一元化した指導を強めることは、事柄の大小なく全部を党組織が代わって請負うことにほかならないと考えたが、結果、しばしば、小事

にこだわり、大事を失ない、小事をつかんで、大事を忘れ、もって、正しい路線とあやまった路線を識別する能力を失なうて、はなはだしきは、修正主義路線を執行した。このようにして、生産がうまくやれないばかりでなく、なお、企業を資本主義のよこしまな道にかならずひきこむことになる。第十回全国代表大会の政治報告は、一歩前進して、党の一元化した指導を強化する経験を総括して、つぎのように指摘している。「日常の具体的な小さな事柄に没頭し、大きな事柄に注意をはらわぬ……これはひじょうに危険なことである……これを改めなければ、かならず修正主義の道に踏みこむであろう」。大事をつかむことは、すなわち、思想と政治路線をつかむことであり、党の基本路線をあくまで執行しなければならず、あくまで、修正主義路線を拒否しなければならず、これによって、企業管理を社会主義の方向にそってたえず前進させることである。これは党の一元化した指導を実現する根本問題である。

党の一元化の指導を強めると同時に、やはり、工場と企業の革命委員会の作用を十分發揮しなければならない。「三結合の革命委員会は、労働者階級と人民大衆が、こんどの文化

大革命において創造したものである⁽²⁾。革命委員会は、プロレタリア文化大革命においてみだされた一つの新生の事物である。一九六七年の「一月革命」⁽⁴⁾のあらしにおいて、革命委員会というこの新生の事物が丁度誕生したとき、偉大領袖毛主席は満腔の熱情でもって労働者階級と人民大衆のこの偉大な創造を支持しそして肯定し、高い見地から観察して、「革命委員会はすばらしい」と指摘している。

革命委員会はすばらしい、ということとは、まず、労働者大衆の代表が企業の各級の指導グループのなかにしよつちゅうりゅう参加し、各項の管理工作中に労働者階級の指導をいっそう体現させていることがすばらしいのである。社会主義企業のなかの革命委員会は、労働者大衆が参加しているが、これは企業の指導権を、マルクス主義者と労働者大衆の手中に真に掌握させるための重要な組織的保障である。プロレタリア文化大革命以前においては、数多くの企業は、いづれも、ことなつた程度に、労働者が管理に参加することを実行し、職員、労働者代表大会、経済活動分析会、小組管理等々の制度をうちたて、やはり、良好な作用をおよぼしていた。しかし、労働者大衆によりなお企業の指導権が真に掌握されていず、一

時的のあいだある若干の企業は社会主義の方向から偏倚し、ある企業は、はなはだしきは、一握りの腐敗した人間によって指導権がかすめとられるにいたっていた。プロレタリア文化大革命を経て、企業の様子は深刻に変化した。労働者大衆は、企業の各級の指導グループに直接参加するよう代表を派遣したが、これは、大衆が管理に参加する新しい発展である。それは、毛主席のプロレタリア階級の革命路線をあくまで実行することを保障し、修正主義路線を拒否する上で、十分重要な意義をもっている。広範な労働者大衆は、階級闘争、生産闘争そして科学実験の三大革命運動の第一線においてたまたかい、党の路線をもっとも容易に理解し、実行するのにもっとも徹底しており、修正主義路線に対してももっとも容易に識別し、拒否ももっとも力強かった。労働者大衆の代表が企業の各級指導グループに直接参加することは、企業における全面的な工作において、大衆の積極的作用を発揮させ、幹部がいっそう効率的に党の路線をあくまでつらぬくことに協力し、そしてそれを監督することができる。生産計画を制定する点についていえば、若干の企業は、過去に、しばしば、工場部のいく人かの幹部がまず討論をして、計画をきめ、そ

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

れから大衆のなかへ討論をおろしていった。労働者大衆は、「これは、その真意はニセの相談である」と批判的にいっている。したがって、労働者の社会主義的積極性は十分動員することを獲得することはできない。たとえ労働者のなかの正しい意見であったとしても、やはり往々にして少数の幹部は自分は「頭がいい」と思い、「専門家」を盲目的に信仰することに、採用されることはない。現在、労働者大衆の代表が企業の革命委員会に参加して、状況は変わった。たとえば、上海のラジオ二十三工場は、一九七三年の年初に、工場の革命委員会が、年間の計画を討論、研究、制定するとき、職場をはなれていない委員が、大衆の意見を十分反映して、数多くの増産と節約、潜在的能力をほりおこす方法を提起して、生産部門が何回も提出している低い指標をひっくりかえして、最終的に一九七二年より二パーセント増の生産計画を作成し、大衆の擁護を獲得した。実際の執行結果は、なお、二カ月有余も時期をくりあげて計画を達成し、生産物の質も、いちじるしく向上した。この工場の計画を作成する過程におけるこの変化は、労働者大衆の代表が直接工場の指導に参加したことを説明しており、工場の数多くの重要問題

一七三 (一七三)

の討論に対して、さらに、発言権をもち、労働者大衆の工場における主人の地位の体現がさらに明白になった。してみると、労働者大衆の代表が工場の指導に直接参加することは、党の基本路線が工場のなかにおいてあくまで執行することができるかできないかの問題にかかわっている。労働者大衆の代表が工場の指導に直接参加することを、あつてもなくても差支えないとみなすその見方は、あきらかに、あやまりである。

労働者大衆の代表が参加する革命委員会は労働者階級の指導を体現している上に、なお、工場と企業の指導グループに深く大衆のなかに根を張らせ、指導グループが大衆路線を堅持し、大衆と密接に結合するための確実な保障をあたえた。企業における革命委員会の代表は、一般的には、職場をはなれていない。「役人」にもなれば、「民衆」にもなる、広範な大衆と血肉となって結合している。このように、一方では、適宜、大衆の意見と要求を反映することができ、他方では、また、党の方針、政策を迅速に貫徹しつづけ、広範な大衆の自覚的行動にかえることができる。無数の事実は、三結合の革命委員会は、大衆と密接に結合することの優越性を具有している、ことを説明している。これは、あらゆる工作

をりつばにおこなう有力な保障でもあり、党の一元化した指導を強化する重要な要因でもある。しかし、ある人は、逆に、企業の党組織がうちたてられたから、革命委員会の歴史的任務はすでに達成されたと、考える。今後は「看板をかかげて、ハンコをおす」のみだと。はなはだしいのになると、党組織が討論し決定した問題を再度革命委員会にもっていつて討論することは、わずらわしさがふえたように、考える。そこで、党組織が直接決定する問題が多くなつて、革命委員会の会議を聞く回数が少なくなつた。結果として、党の一元化指導は、「一手に」請負することにかわつてしまい、革命委員会の作用は、十分發揮することができない。事実上、革命委員会の作用を軽視することは、かならず党と大衆とのあいだの關係に影響をあたえ、指導グループの革命化に不利になり、党の指導を強めることに不利になる。党の一元化指導を強めることは、決して、党組織が革命委員会に代替しなければならぬことではなく、実際、代替しようにも代替することはできない。党組織は、革命委員会の作用を十分發揮させ、革命委員会を運用して大衆と結合することを重視することによつてのみ、真に党の一元化指導を強化することができる。

プロレタリア文化革命において広範な大衆が創造した老年、中年、青年の三結合の経験は、われわれが毛主席の提起している五カ条の基準に照して、千万百万のプロレタリア階級の革命事業の後継者を養成するため、有利な条件を創造した。三結合の革命委員会は、新しい幹部の養成と成長にきわめて有利である。完全でない統計によれば、上海の一部の企業が革命委員会をうちたてて以来の六年のあいだ、労働者のなかから養成した各級の新しい幹部は、一般的にプロレタリア文化大革命以前の十七年の労働者のなかから養成した幹部の総和をいずれもこえ、ある企業は、はなはだしく倍以上に多くなった。労働者のなかから新しい幹部が成長したことは、文化大革命の重要な成果である。これらの同志は、各級の革命委員会の指導的ポストと結合してからは、責任が重くなり、めっきり鍛錬されて、加えて、革命委員会における新旧の幹部がいっしょに工作し、相互に学びあい、長所をとりいれて短所をおぎない、古い幹部が新しい幹部をひきたて、新しい幹部は古い幹部をおぎなう、これは、組織上から、プロレタリア階級の革命事業の後継者を養成する重大な任務になった。数多くの企業の古い幹部は、やはり背負うべき責任をわりあ

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

い自覚して意識し、新しい幹部から虚心に学びもし、また、情熱をもって新しい幹部の成長に関心をもっている。毛主席はまさにつきのように教えている。「老年を大衆から離れさせず、青年を鍛錬させる」。(3) 三結合の革命委員会の作用を十分發揮することは、われわれの幹部の隊列をしていっそう盛大に成長させ、後継者に人材を擁せしめ、さらに進取の氣象に富ませることができぬ。

革命委員会は、深く厚い大衆的基盤をもち、変えることのできないものである。数多くの単位の革命委員会が成立したときを回顧すれば、広範な職員・労働者は、非常に歓喜し鼓舞したのである。このことから、われわれは、満腔の熱情をもって、それを擁護し、それを支持し、それをうちかため、それを発展させなければならない。革命委員会は、文化大革命のなかで誕生した新生の事物である。林彪というこれらのたぐいは、あらゆる革命の新生の事物に対して、いつも、恨み骨髄に徹している。批林批孔闘争のなかで、林彪反党集団の社会主義の新生の事物に対する悪辣で陰險なあくたいをつくいろいろな謬論を徹底的に批判し、老年、中年、青年の三結合の革命委員会をしてさらにさかんに芽をださせ成長させ、

発揚し、輝かしいものにしなければならない。これは、プロレタリア文化大革命の勝利の成果をうちかため、そして発展さすことにかかわる一つの大きな問題であり、広範な大衆の創造的精神に対して正しく対応することにかかわる一つの大きな問題であり、そして、工場と企業の闘争、批判、改革を真面目にりっぱにおこなうことにかかわる一つの大きな問題である。党の一元化した指導の下に、企業の革命委員会の作用を十分發揮させるなら、かならず、社会主義企業管理をりっぱにおこなうことを一歩前進させることができ、社会主義企業を永久に党の基本路線の軌道にそって勝利のうちに前進させることができる。

傳増滋

- (1) 転引自周恩来同志へ在中国共産党第十次全国代表大会上の報告『中国共産党第十四次全国代表大会文献集』外文出版社二五ページ。
- (2) 毛主席語録。転引自一九六八年三月三〇日へ『人民日報』。毛主席語録。一九六八年三月三〇日『人民日報』より再引用。
- (3) 転引自一九六八年三月三〇日へ『人民日報』。一九六八年三月三〇日『人民日報』より再引用。

訳注

- (A) 一月革命—プロレタリア文化大革命において、プロレタリア

革命派は連合して、ひとにぎりの共産党内の資本主義の道を歩む実権派から権力を奪取したが、この奪権闘争のあらしは、一九六七年一月に上海からはじまった。新生の上海の『文匯報』は、上海市の十一の革命造反組織が連名で発表した「上海全市の人民に告ぐる書」を掲載し、上海のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派の陰謀をきびしく暴露し、「一月革命」の進軍ラッパを鳴らした。同年二月五日、上海のプロレタリア革命派は、上海市委員会と市人民委員会のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派のすべての権力を奪取し、臨時最高権力機構である革命委員会を樹立した。上海の「一月革命」のあらしは、全国の省、市をまきこみいく百万の革命的大衆が奪権闘争をくりひろげ、資本主義の道を歩む実権派のたてこもるとりでを一つ一つ攻略した。

付論

社会主義から資本主義への逆移行の論理

—ソ連における資本主義の全面的復活に

関連して—

もし、現代の政治経済学の体系を考えるとすれば、それは、現代世界の政治経済の現象的総和から出発しなければならぬであろう。マルクスが『資本論』で適用した方法のように、事物に対して科学的分析を加える場合には、かならず、事物

を純粋な形態で把握しなければならない。対象をそれ自身純粋な形態で考察することによってのみ、はじめて、複雑な事物の発展過程における、その他の矛盾の存在と発展を規定し影響をあたえる、主要矛盾を発見することができる。そして、この主要矛盾の各側面の特殊性を具体的に分析することが、所謂唯物弁証法における分析の方法である。だとすれば、現代世界の政治経済の現象的総和から、純粋な形態で、現代世界を動かす原動力としての基本矛盾を析出し、そして、現代世界の基本矛盾の特殊性を、階級分析の立場から具体的に分析を加えなければならない。そうすることによってはじめて、現代世界を動かすさまざまな具体的な矛盾を発見することができる。現代世界の基本矛盾は、今日、突然発生したものであるが、過去の世界における基本矛盾の運動の結果であるから、我々は、当然、各時期における基本矛盾の変化を分析しなければならない。歴史的分析を加えなければならない。それでは、現実的に客観的に存在する現代世界の四つの大きな基本矛盾を具体的にどのように把握するのかわかという問題にぶつかる。とくに、今日のソ連を現代世界の基本矛盾の運動と構造のなかでどのように位置づけたらよいかという問題に直

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

面する。アメリカが帝国主義国であることは周知の事柄で問題はなすが、ソ連を（社会）帝国主義とみなすかどうかという問題である。私には、ソ連を社会主義国とみなすかそれとも資本主義国とみなすかという問題はもうこれ以上曖昧にしてすませる問題ではなくなってきたように思えてならない。マルクス主義の眞實を検討する根本問題になってきたようである。

マルクス経済学者のあいだでは、相変わらず、ソ連は社会主義社会であるというのが常識であり、定説であつて、ただ社会主義社会だけでなく、政治上で修正主義的偏向をおかしているとか、大国主義であるとか、官僚主義がはびこっていると、腐敗した労働者国家であるとか、という程度の曖昧模糊とした認識にとどまっている。このような認識にとどまっているのは、ソ連の政治路線や思想上の上部構造の面ではかなり問題はあるが、生産手段は国家的所有であつて、社会主義の経済的土台は確立しているから社会主義社会であるという根拠にもとづいている（この問題は、唯物史観の根本範疇である、生産力と生産関係、土台と上部構造のあいだの関係、又、政治・思想と経済のあいだの関係、そしてマルクス主義の精髓である。プロレタ

リア階級独裁の問題、マルクス主義と修正主義のあいだを区別する普遍的原則の問題をどう具体的に理解するのかに直接関係してくる。

国際的にみても、ソ連に対する認識は、中国を除いて、この程度の認識のようである。こうした状況のなかで、中国のマルクス主義者をはじめて、公然と、ソ連は、一九五六年のソヴェート共産党第二〇回大会を契機に、徐々に、社会主義社会から資本主義社会に変質（イデオロギーの領域でも、ブルジョアイデオロギーとの共存現象があらわれてくる）し、現段階のソ連は、社会帝国主義であると主張し、帝国主義国アメリカよりも欺瞞的で危険な帝国主義であると断言してはばからないのである。中国のマルクス主義者のこの主張を「政治的」なレッテルはりであるとみるのは自由であるけれど、中国のマルクス主義者（あるいは毛沢東）のこれまでの一貫した思想方法からみれば、確固とした理論的、具体的根拠にもとづいて主張していることはまちがいない。ソ連の対外的政策と対外的行動については、世界の人々に、その行動の帝国主義的性格は明白になりつつあるけれど、国内における資本主義復活についての材料は、われわれには情報としてあまり知らされていない。中国は、こうした資本主義復活の資料についても掌

握していると思われるが、例によって、われわれには、あまり知る余地もない（日本人民は、他国だけに依存するのでなく自力でこの問題を解明する責務がある）。しかし、資本主義復活の理論的根拠については、中国のいろいろの文献から、十分系統的に、その論理を知ることができる。私が理解する範囲で、中国が、ソ連を国家独占資本主義であり、社会帝国主義であるというその論理を整理しておくのも今日的な意義のあることで、とくにここでは資本主義復活論の論理について提示しておきたい。人類史上最初の社会主義国家に、何故、資本主義が全面的に復活したのか。そして、どのように社会帝国主義に変質したのか。その理論的根拠は何か。この問題は、社会主義社会が資本主義社会に逆行するという、社会主義社会にとって深刻な重大問題であるだけでなく、第三世界を含めた全人類にとってきわめて深刻な問題なのである。とくに、資本主義社会にとっても重要である。今日、日本をはじめフランス・イタリヤ等々の所謂「高度に発達した資本主義国」においては、今日のソ連「共産党」と本質的に同一の思想的基盤あるいは、世界観をもつ修正主義党（日本では「日本共産党」）が、条件によっては、将来、国家権力を掌握する可能性が

あり、もし、これが実現した場合、プロレタリア民主主義は当然のこと、ブルジョア民主主義をも否定した今日のソ連社会のようなナチズム型の体制になるか、あるいは、ソ連社会帝国主義に従属する国になる可能性と現実性が予見されるからである。現代のソ連社会は、人類がいままで経験したことのないファシズムの現代的形態である（したがって、ソ連が第三次世界大戦の震源地になることは十分根拠のあることである）。このことが人々をして非常に理解しにくいものにしてている。

この小論の主たる目的は、社会主義社会がいったん成立すれば論理として資本主義社会へ平和的に移行する可能性はないという一般的な先入見に対して、社会主義社会から資本主義社会への逆移行の可能性（必然性ではない）は具体的につねに存在しており、一定の条件があたえられれば、その可能性は現実性に必然的に転化するということを論理的に明らかにすることである。

さて、それでは、ソ連において、何故資本主義が全面的に復活したのかという論理的根拠について説明しよう。そのためには、資本主義社会から共産主義社会（無階級社会）への過渡期としての社会主義社会（マルクスのいう共産主義の低い段階）

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

の性格を明確にすることによって、その論理的根拠を容易に説明することができる。

マルクス主義の究極の目標は、無階級社会としての共産主義社会を実現することである。それでは、共産主義社会とはどういう社会なのであるのか。共産主義社会では、階級と搾取がなくなり、所謂三大差異（労働者と農民のあいだの差異、都市と農村とのあいだの差異、肉体労働者と精神的労働者のあいだの差異）が消滅し、人間が分業に従属させられる状況が消失し、労働が生活を維持する手段から生活の第一義的要求となり、大多数の人々が高度の共産主義的意識をもち、公共生活の基本的規則を守ること、社会的義務を履行することに慣れ、特殊な強制機関の必要がなくなり、報酬ゆきで公共の利益のために働くことが普遍的现象になり、生産力が高度の発展をとげ、「各人が能力に応じてはたらき、必要に応じて報酬をうける」原則が実行される。こういう社会が無階級社会としての共産主義社会である。もちろん、共産主義社会にも矛盾は存在する。矛盾がないような社会は存在しない。しかし、まだ、人類は、共産主義社会を経験していないし、また、共産主義は一国的規模では実現しえない。世界革命にまたなければ

ばならず、かならず、世界的規模で実現されるにちがいない。

さて、話しをもっと現実にはひきもどそう。資本主義社会から共産主義社会への過渡的形態としての、現段階の社会主義社会とはどういう性格の社会なのか。ふるい社会から生れたばかりの、共産主義の低い段階としてのこの社会主義社会は、

「あらゆる面で、経済的にも道德的にも精神的にも、それが生まれ出てきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている」(マルクス)。この段階の社会主義は、やっと、ブルジョアの権利としての生産手段の私有制を、全人民的私有制と集团的私有制におきかえたにすぎない。この範囲内では一応ブルジョアの権利は消滅したが、また、ブルジョアの権利がのこっている。

現段階の生産力の発展水準を反映している全人民的私有制と集团的私有制という二種類の私有制の存在は、商品生産と商品交換、商品貨幣関係の存在を規定する(経済的構造としての生産関係の総和は、(一)生産手段に対する所有権の関係、(二)に規定された社会的労働組織における人々の役割、(三)に規定された生産物の分配形式、の三つの諸側面から構成されている。社会主義社会では、第一の側面の生産手段所有制の問題は完全ではないが、一応解決されたとしても、第二、第三の側面は、未解決のままのこっており、

この二側面が第一の側面である不完全な生産手段所有制に反作用をおよぼす。この場合、社会的労働組織においてそれぞれの役割をはたしている人々の思想が重大な作用をはたす。とくに国营企業や集団農場における指導的、指導的任務についている人々の世界観が決定的に重要である。これらの人々がブルジョア世界観に転落し、この世界観にもとづいて行動するならば、すなわち、自己の有利な地位を利用して、分配を大きくし、そして、生産物の分け前の大きさを利用して、さらに、物質的刺激や買収によって労働者大衆や農民大衆を利益誘導し、労働者大衆や農民大衆の革命的要素を麻痺させるか、物質的刺激や買収に応じないで反抗する労働者大衆や農民大衆は、その指導的任務を利用して組織的紀律でしめつけて反抗をおさえ、徐々に生産手段の社会的所有制度をほりくずしていく。国家権力の中枢部門が修正主義者ののつとられるならば、この傾向は、修正主義者に支援されて、いっそう加速化されて、最後に、生産手段はブルジョア特権階層ににぎられ、生産手段の社会主義的所有制度が実質上解体される。「小生産は、資本主義とブルジョア階級を、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしている」とレーニンのはべているけれど、このような状況が依然として存在しつづけている。そして、賃金制度の不平等などの分配面でのブルジョアの権利がまだのこっている。工業と農業、都市と農村、頭脳労働

と肉體労働とのあいだの差異も依然として存在している。これらの諸要素は、現段階の生産力の發展水準と人民大衆の思想的水準から一挙になくすことはできない。が、プロレタリア階級独裁の下では、これらの諸要因は、制限を加えなければならぬ。プロレタリア階級独裁の任務の一つは、これらをなくしていく条件を一步一步創出していくことである。じつは、古い社会からもちこまれたこれらの經濟上の母斑が、社会主義社会における、資本主義復活、修正主義發生の經濟的条件である。現段階では一挙になくすことのできないこのような經濟的土台があるかぎり、いつでも、社会主義には、資本主義復活の内在的根柢がそなわっているのである。

上部構造の領域では、地主・ブルジョア階級などの搾取階級のイデオロギー上の影響とふるい社会の習慣の力はなお依然として強力であり、それらは、毎時間、毎日、プロレタリア階級の社会主義制度をゆさぶっている。これらの内在的諸要因が、外的要因としての外国帝国主義の存在とあいまって、修正主義と資本主義復活の政治的、思想的条件である。だから、プロレタリア階級独裁の権力は、搾取階級のイデオロギーの影響に対してもたえず断固として闘争をおこない、克服

することが非常に困難な社会の習慣の力に対しては、一步一步これを消滅していかなければならない。

社会主義社会とは、死滅しつつある資本主義の要素と生れようとする共産主義との闘争の時期であり、この闘争は、プロレタリア階級と (一) 新しいブルジョア分子とくつがえされた反動的搾取階級の反抗、(二) 無数の小生産ののこりかすと結びついた巨大な習慣勢力、保守勢力との受動的な反抗としてあらわされる。

以上が、資本主義社会から共産主義社会への過渡期としての社会主義社会の性格のエッセンスであるが、このような性格の社会主義には、修正主義發生の政治的、思想的そして經濟的条件が充滿しており、プロレタリア階級独裁を解消すれば、資本主義への復帰は不可避である。プロレタリア階級独裁を断固として擁護し、強固にし發展させなければ、共産主義への移行など問題にならない。經濟学主義的な見地で、生産手段所有制の社会主義的改造だけに、焦点をあわせているだけであったり、社会主義の具体的現実を階級的に分析せずに、マルクス、エンゲルスの古典的規定をいじくっているだけで、社会主義社会が資本主義へ逆行するという問題などまっ

たく理解できない。

それでは、社会主義社会には、修正主義発生の政治的、思想的そして経済的基礎が存在し、資本主義復活への可能性が存在することがわかったが、その可能性を現実性に転化する基本的な条件は、国家権力の性質の問題である。「あらゆる革命の根本問題は国家権力の問題である」(レーニン)。権力の性質は、権力の担い手Ⅱ人間の性質に依存している。そして、いかなる世界観をもつか、その人間の性質を規定する。ここで、ブルジョア世界観の核心は、私心Ⅱ私有観念であるという意義が大きくあがってくる。修正主義者とはブルジョア世界観の持主である。現在の社会主義の下では、さきへのべたように、生産手段所有制の社会主義的な改造がなされたのであって、まだブルジョア的権利がのこっているから、その経済的土台の状況が、上部構造、とくに、国家権力に反映し、国家権力をめぐる闘争が生じる。修正主義者が勝利して権力を掌握したとき、権力の性質は変質し、プロレタリア階級独裁は、ブルジョア階級独裁に転化する。そして、勝利した修正主義者は、権力を利用して、経済的土台から上部構造の全領域にわたって、修正主義路線をおしすすめ資本

主義を全面的に復活させるのである。すなわち、国家権力が、誰の手に掌握されるのかということが根本問題である。真正のマルクス・レーニン主義者か、それとも修正主義者か。それでは、修正主義とは何かということ(換言すれば、マルクス主義とは何かということ)を明確にしておかなければならない。話しは、若干横道にはいるようにみえるかもしれないが、この問題については、マルクス主義と修正主義とのあいだの境界を明確にしておくことがとくに肝要である。現代修正主義は、マルクス主義やレーニン主義の真髓や核心的部分については用心深くさける。マルクス、エンゲルスそしてレーニンなどは、時と場所によっては、まったく正反対のことをいっていることが多々あるので、修正主義者は自分に都合のいいところだけを引用する。「マルクス主義のますます精密な偽造、反マルクス主義的な学説をますます精密にマルクス主義で偽装すること……これこそ……現代の修正主義の特徴である」(レーニン『唯物論と経験批判論』(2)国民文庫、四六三ページ)。経済学者は、修正主義や労働貴族の経済的基礎についてはよく分析するけれど、それだけでは、修正主義とは何かということの答にはならない。修正主義とは何かということもわか

らず、その経済的基礎をいくら分析しても、自分がその経済的基礎から培養されている修正主義者になっているかもしれない。マルクス・エンゲルスの時代から現在にいたるまで、国際共産主義運動の歴史において、マルクス主義と修正主義との闘争は、プロレタリア階級独裁と資本主義から社会主義への平和的移行の問題について集中的に表現される。今日では、両者の闘争の焦点は、さらに社会主義社会に階級、階級矛盾、階級闘争が存在するかどうかをつけ加えるべきであろう。修正主義は、マルクス主義の真髄であるプロレタリア階級独裁を否定し、資本主義から社会主義への平和的移行を全面的に主張する。所謂「敵のかた」論は相互の力関係の如何によつては、移行の形態は、平和的にも、武力的にもなるということであるが、力関係の如何にかかわらず、むしろ人民大衆の力が大きくなればなるほど、ブルジョア階級独裁が危険にさらされ、かならずその暴力装置としての国家権力を発動する。ブルジョア階級独裁は、その階級の独裁を維持するために暴力装置を掌握しているのである。これがいままでの反復してくりかえされた歴史の真理である。これを認めないものは、歴史科学としての社会科学を否定するものである

宮效聞他編著『社会主義企业管理』（小野）

（所謂「平和移行」は、もっとも望ましい誰でも理想とするところであるが、理想と客観的真理とをとりちがえてはならない。ついでに一言。井上晴九・宇佐美誠次郎共著『国家独占資本主義論——日本経済の現段階——』（潮流社一九五〇年）は、「プロ独裁の二形態（ソヴェト形態と人民民主主義形態——小野）の如何と平和云々とは一応別個の問題である。平和云々を決定する要因は直接的には支配階級の出方如何に大きく左右される」（二六五ページ）といつて、所謂「敵の出方」論を主張して、この観点から、日本の国家独占資本主義を分析している。日本の国独資論の研究においてこの両氏の研究から現在の国独資論のそれにいたるまで、両氏の基本的観点と基本的枠組からいっこうにぬけていけないばかりか、むしろ最近の研究では思想上もっと後退している。私見によれば、上記の理由から、『敵の出方』論というこのような観点でいくら国独資を分析してもまったく意味がない。第二インターのベルンシュタインとカウツキーは、プロ独裁に反対することによつて修正主義に転落した。第二次世界大戦中のブラウダー修正主義しかり。ブハーリンは社会主義社会における階級闘争消滅論を主張し、それをうけつぐフルンチョフ修正

主義、また、しかり。そして、現在のブレジネフ等々は皆しかりである。中国では、生産手段所有制の社会主義的改造が完了したあと、国内の主要矛盾は、「先進的な社会主義制度とおくれた社会的生産力とのあいだの矛盾」であるとして、社会主義社会における階級闘争消滅論を主張した劉少奇も同類である。あらゆる修正主義は、マルクス主義の普遍的真理である、プロレタリア階級独裁の学説に反対し、ブルジョア階級独裁の支持者になる。今日の時代においては、独裁については二種類しかない。人民民主主義独裁は、実質はプロ独裁である。それ故、一方でなければ他方である。

かくして、プロレタリア階級独裁に反対する修正主義の登場は、ブルジョア階級独裁に賛成するブルジョア階級の登場なのである。ソ連共産党第二〇回大会において登場したフルシチョフこそこういう人物であった。フルシチョフは、スターリン批判(その批判の核心は、プロ独裁反対である。ついでに一言。中国は、スターリンはプロ独裁を堅持したという基本をおさえた上で、外因は内因を通じて作用するという基本的観点から、スターリン問題をとりあつかっている。スターリンに誤りがあったとしても、それを受け入れたのは、自分達に思想上の弱点があったからで、それ

を自分達の誤りとして受けとめるという観点である)をかかげて、ソ連共産党を修正主義党に変質させた。このようにして、プロ独裁の国家が、ブルジョア独裁の国家に変貌をとげ、資本主義が全面的に復活していくのである。

一九一七年の十月革命後、ブルジョア階級は、ソ連でくつがえされたが、決して消滅しなかった。社会主義国有化と農業集団化が基本的に実現されたあと、ブルジョア階級、富農その他の搾取階級は、生産手段の所有権は剝奪された。しかし、これらの階級の人間は、生産手段の所有権は剝奪されたが、思想や世界観はそのままなお生きつづけ、あらたまっではない。都市と農村において、ブルジョア階級の影響は依然として存在しており、資本主義の自然発生的な力は依然として存在している。新しいブルジョア分子や富農分子がたえず発生しつづがある。一九五二年十月にいたるまで、なお、このような情況が存在していることを、ソ連共産党第十九回代表大会報告のなかでつぎのように指摘している。「いくらかの党組織のなかに、墮落と腐敗現象が生れている。いくらかの党組織の指導者は、党組織を親しい人間によって構成される小さな家庭にかえ、彼等の小集団の利益を党や国家の上に

置いている”。いくらかの工業企業の指導者は、“彼等に管理と指導をまかされている企業が国営企業であることを忘れ、結局これらの企業を彼等の世襲領地にかえようとたくらんでいる”。いくらかの党組織、ソヴェト機関や農村機関のなかの工作要員は、“コルホーズの公有経済の利益を擁護しないばかりか、反対に、自らコルホーズの財産をかすめとっている”。文化芸術と科学等の部門でも、社会主義制度を攻撃し、あなどる作品があらわれており、科学者集団の「学閥式」の独占現象が発生している」（『關於正確処理人民内部矛盾的問題』浅説）上海人民出版社一九七四年十一月の付録『蘇連資本主義全面復辟材料簡編』から引用した。この付録は、三三六頁にわたってかかれており、私の知るかぎり、ソ連における資本主義復活についてのかなりまとまった材料である。迫力ある分析は、読むものにとってソ連社会帝国主義の危険性を訴える。このことは、意識するとしないとにかかわらず、また人々が承認するとしないとにかかわらず、十月革命以後、客観的にソ連の党の内外にずっと、激烈な二つの階級、二つの道の闘争が存在しており、資本主義復活の危険性が存在していることを説明している。フルシチョフからブレジネフにいたるソ連の修正主義集団は、当時から、ソ

宮效聞他編著『社会主義企業管理』（小野）

連共産党内にひそんでいたブルジョア階級の代表的人物である。スターリンが在世中は、彼等は、「齟齬」戦略をとり、ブルジョア階級の代理人としての真理をおおいかくし、マルクス主義者をよそおい、そして信任を獲得して、一步一步はいあがり、党と国家の数多くの重要部門の指導権をかすめとった。フルシチョフ等は、突然、かすめとった権力を利用して、“秘密報告”でスターリン批判をおこない、“官廷クーデター”を発動し、党と政府の全権力をにぎり、資本主義を復活させた。

ソ連修正主義グループが党と政府の大権力をかすめとったあと、ブルジョア特権階級は、大々的に、自己の政治権力と経済権力をふとらせて、党、政府、軍隊、経済、文化の各領域で支配的地位を占め、かつ、そのなから、全国家機関を掌握し、全社会の富を支配する官僚独占ブルジョア階級を形成した。国家独占資本主義の形成である。ソ連のように、共産党組織を中心に、組織上において、高度に中央集権化された政治機構をもった社会がこのように資本主義に変質し、官僚独占ブルジョア階級が、支配するようになれば、既存の集中した組織形態が温存され、利用されるのでただちにファッ

シズム型の支配形態をとり日本やアメリカ型のブルジョア民主主義さえも決して保障されえないことはとくに注目しておかなければならない。

最後に、国家権力の性質が国家所有制の性質を決定し、国家権力の性質は、権力の担い手の世界観の性質に依存している、ということを経論上のテーゼとして提起しておく。とくに、社会主義社会から資本主義社会への移行の過程において、また、過渡期としての社会主義の下では、国家のはたす役割をたんに経済的土台にたいする反作用という消極的意義ではなくて、国家が経済的土台に対して積極的な作用をはたすということを重視しておかなければならない。

（一九七五年四月一五日）

中国語の文字は、本来なら「簡体字」を使用すべきであるが、印刷の都合上所謂「繁体字」のままにしておいたので了解されたい。